

やはり俺の青春ラブコ
メはあっている。

✂セイキチ✂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルを全巻買って、読んでいたらつい書きたくなってしまったので八幡×雪乃を書いてみたくて衝撃にかられて書くことにしました！

要望、感想があればどんどん教えてください！応えられるように頑張ります！

2 / 6 50000UA達成！

2 / 10 100000UA達成

目次

1.	プロローグ	1							
大学編									
2.	由比ヶ浜はやはりバカの子である	5							
3.	雪ノ下雪乃は積極的である…?	12							
4.	比企谷八幡はリア充である	19							
編									
5.	比企谷八幡はリア充である	25							
6.	やはり俺の後輩はあざとい	68							
編									
7.	俺の休日は潰れる	31							
8.	俺の休日は潰れる	37							
9.	雪ノ下雪乃は比企谷八幡を追い詰める	41							
10.	2人はデートする	51							
11.	2人はデートする	56							
12.	2人はデートする	62							
編									
13.	2人はデートする	68							

2 2.	ちよつとしたすれ違い	後編	116
2 1.	ちよつとしたすれ違い	前編	111
2 0.	夢		103
1 9.	幸せ		99
1 8.	日常		93
1 7.	同棲		88
1 6.	2人の想い	後半	84
1 5.	2人の想い	前半	
79			
1 4.	雪ノ下雪乃は決断する		
74			
1 3.	比企谷八幡は苦勞する		

137	番外編		
	比企谷八幡の日常		135
	Happy Valentine		
	2 4. 家族デート		131
	2 3. 2人の子供		125
			119

1. プロローグ

18年間生きてきた中で今、卒業式が終わった直後に衝撃的な事が起こった。誰がこのボツチにこんなことが起こると予測したであろうか？こんな展開になると誰が分かったのだろうか？

——雪ノ下雪乃が比企谷八幡に告白をした。

絶対にありえないと思っていた。その言葉を聞くまでは…

「そ、その私と付き合ってくれるかしら？」

雪ノ下は恥ずかしそうに俯きながら言った。

俺は冗談かと思つたがこいつはそんな嘘をつかないことを知っている。

ならあれか？由比ヶ浜の誕生日だからまた買ひ物に付き合えということか？

それは違う。卒業式が終わった直後…つまり3月なので由比ヶ浜の誕生日はまだまだ先のはずである。

考えれば考えるほど分からなくなってくるので、この心にあるモヤモヤをそのままぶつけてみることにした。

「それってどういう…」

「言葉の通りよ」

今度は俯かず俺を見ながら言い放った。相変わらず顔が赤いままだが。

言葉の通りつてもしかして、そういう意味ですか？

「つまり、リア充になりましたよということですか？」

「あなたが言うとな変な感じするけど間違っていないわ」

ええー？認めちゃったよー？俺はどうしたらいいのだろうか。

俺は少し前に＜本物＞を見つけたいと2人に、雪ノ下と由比ヶ浜に言った。何かは分らないまま探すことにした。しかしそれは見つからなかった。理由は…

本物がすぐ目の前にあるのに迷い掴むことを恐れたからだ。

だが、今は俺が求める本物が向こうから近寄ってきた。これで合っているのだろうか？

こればかりはどうしても不安になってしまふ。

「お、お前は…雪ノ下は本気で言っているのか？」

「相変わらずね。本気じゃなかったらこんなことをあなたに言うはずがないでしょ？」

「ああ、それもそうだな」

雪ノ下さんは相変わらず強気ですね。俺はいきなりの告白で戸惑っているというのに。

…いや、戸惑うことはない。答えは最初から決まっている。

「なら、よろしくな」

「ええ、こちらこそよろしくお願いするわ」

雪ノ下は柔らかい笑顔を浮かべながらこちらに歩み寄ってきた。

「あなた夢とか思ってるんじゃないでしょうね?」

「そ、そんなわけではないよ?」

そんなわけありません。てか夢としか思えません。だってあの雪ノ下雪乃が俺に告白したんですよ?どうやって信じろと??

「夢じゃないわよ。ほら、痛いでしょ?」

夢か現実かをハッキリさせるために俺の頬をつねった。

「痛い痛い!ちよつと強くつねりすぎ」

「あら、ごめんなさい。現実だと認識させるためについつい強くなってしまったわ」

「そんなに強くしなくてもいいんじゃないですか?」

「だめよ。比企谷くんはこうしないといけないもの」

ふふつ、と先ほどと同じように優しい笑顔を浮かべる。

「こんな笑顔を俺みたいになやつに向けられたら…それはもう、ね?」

「それなら帰りましょうか?」

「そうするか」

「何ニヤニヤしているの？ 気持ち悪いわよ」

無意識のうちにニヤニヤしていたらしい。

それでも彼女にこんな事言われると何故か悲しい。今までと関係が変わったからだろうか？

「うっせ、早く帰るぞ」

「わかったわよ」

俺と雪ノ下は2人揃ってゆっくりと歩き始めた。

いつ終わるか、いつ別の道へ行くかは分からないが一緒に居られる時はなるべく一緒に居たいと思うばかりである。

大学編

2. 由比ヶ浜はやはりバカの子である

時は過ぎ、今は大学の入学式である。

少し前に卒業式をやったばかりなのにもう入学式か。いや、あんな事があつたから考えているうちに入学式の日になったという感じだ。

ちなみに雪ノ下は一緒の大学ではない。あいつは理系で俺は文系を選択したからだ。一緒の大学行きたかつたな…。

理系に行くために努力したが、あいつが狙っているのは国公立なので到底叶わなかつた。なので、諦めて文系にしたというわけだ。

しかし、意外なこともあるもんだ。高校のテストであんなに手こずっていた由比ヶ浜が俺と同じ大学に居るのだ。

——あれ？俺の受けた入試ってそんなに簡単だつたつけ？

一瞬だが錯覚してしまうほどだ。

噂をすればばたばたと走ってくる姿がこちらへ向かつてくる。

「ヒッキー！」

「うるさいな。やっぱりバカの子だ」

「会ってすぐに罵倒された?！」

「おぉー今わかって使ってるのか?」

「当たり前だし! わかってなかったら使わないし!」

さすがは大学入試を一般で受かっただけはあるんだろうか。俺は素直に信じることは出来ない。因数って何? って聞いてくるレベルだぞ? 文系だから数学は必要ないといつても俺でもわかることだぞ?」

あ、でもあいつは俺より点数高かったんだ。

すごいシヨック。

「ヒツキー? 目腐ってるよ、大丈夫?」

「いつものことだし、いきなりとか酷いな。雪ノ下に似てきたか?」

「ええ? ゆきのんに? えへへ、嬉しいなく」

顔を真っ赤にして照れているようだ。

褒めてるつもりはさらさら無かったのだが、まあ嬉しそうだし気にしないでおくか。

「そろそろ入学式始まるよ?」

「もうそんな時間か。なら行くか」

「うん!」

元気に返事をする。由比ヶ浜は元気いっばいに歩き始めた。元気なのはいいけどスキップとかやめて？見ちやうから！何とは言わないよ？

「うわあー大きいねー」

「そうだな。さすがは私立といった感じだ」

俺と由比ヶ浜は入学式が行われるメインホールへ到着したところだ。

高校でいうなら体育館的な場所だが、広さがまるで違う。バスケットコート5面はあるかというような広さが目の前に広がる。

「俺の席はこっちなだ。由比ヶ浜は？」

「あたしはねーもつと後ろの方かな。遠くなっちゃうけどまた後で話そうね」

「了解」

由比ヶ浜は俺に手を振ってから自分の席へと歩いて行った。

ようやく1人になれた。由比ヶ浜なので全く知らないやつと比べると気にしなくていいのだが、女子ということもあつてかどうしても気にしてしまう。これが長年染み付いたボツチの副作用かもしれない。

俺があれこれ変なことを考えている時に大学の校長が挨拶をし入学式が始まった。

新入生歓迎の意味を込めて吹奏楽部？みたいな人たちが様々な楽器を使って演奏をしてくれた。音楽に詳しいだけではないが、聴いていてとても心地よい音が鳴り響く。

「——これでは入学式を終了する。起立、礼。」

一人だけ座っているのはまずいと思つたのか、瞬間的に立ち上がつて礼をした。今までボツチだつたおかげで危険察知能力はそこらのやつより長けてるぜ。

自信満々に胸をはろうとしたが、自慢できることではないし、由比ヶ浜に言つたら「ヒツキーマジキモ！」

つて言われるだけなのでやめておこう。雪ノ下に似てきたさいきんならもつと酷いことを言うかもしれない。その時は・泣こう。

「ヒツキー？なんでそんな顔してるの？」

「いや、少し考え事をな」

「んー？何考えてたの？」

「お前がどうやって入学したか」

あながちウソでもない。本当に気になるのだ。ていうかお金出して入学…これ以外思いつくものがないので仕方はない。

「ちゃんと勉強したからだし!!お金とか出してないし！」

「それでも少し勉強した程度でこんな良い大学が受かるはずがないので興味本位で聞いているだけだ」

「ヒツキーひどい！」

喧嘩しているように見えるかもしれないがそういう訳では無い。コミュニケーションの一つであるので全く問題ないのである。

「まあいいや 今日ひま？」

「いや、忙しいぞ。ちよー忙しい」

「暇だよねー なら昼ごはん食べに行かない？」

「暇じゃないって言ってるよね？嘘だけど」

「ほら嘘じゃん じゃあ、行くよね？」

「はい、お供します。でも夜は本当に用事あるから無理だぞ」

「はいはい、わかったよー」

本当にわかったのか？と問いたくなるがバカの子なので我慢しておこう。

「どこいく？帰る？」

「何でそんな自然に帰宅を勧められるの?!」

「冗談だよ。サイゼ？」

「ええー？まあいいつか」

結局サイゼに行くことになった。口ではちよつと嫌だなくみたいな顔しておきながら表情を見るととても楽しそうで、遠足の前の日の小学生に見える。言うど怒るので心の中にそつとしまっておく。

「何か変なこと考えなかった？」

「え？な、何にも考えてないよ。」

「そう、ならいいけどねー」

ナチュラルルに心を読まれると非常に変な感じがするので辞めてもらいたい。

心の中で由比ヶ浜をデイスっていたらサイゼに着いていた。大学から徒歩5分の距離って学食で良かったんじゃないですか？

「着いた〜！今日はヒツキーの奢りだからたくさん食べるぞー！」

「え？そんな事言っていない。金持っていないから俺もあんまり食べるつもりないし」

「仕方ないなあー あたしはドリアかなー」

「俺も同じので」

サイゼに入ってからというものずっと高校の話をしていった。

俺がいつも期待の斜め下の解決方法を出してドヤ顔していたこと。

俺が戸塚のことをニヤニヤしながら語っていたこと。

…あれ？全て俺の悪口ですね。まあ気にしてないからいいですけどね。

後は雪ノ下の話とか…。

今あいつの話を読まれるとやばいぞ。どうしても恥ずかしくなってしまう。由比ヶ浜の事だから気づいてないかと思うが。

高校時代の思い出話を散々したおかげで気付けば6時を回っていた。

「わりのー用事あるからからこの辺でお開きにするか」

「そうだねー 学校同じだからまた明日会えるしね」

「おう。ならまた明日な」

「うん！またねヒッキー！」

手を振ってから俺らは互いに違う方向へと歩き出した。

俺が今行くところは彼女の家である。つまり、雪ノ下雪乃の一人暮らししている所に乗り込むという訳である。

なぜ行くかって？理由は簡単だ。

「あなたも一人暮らししているけどどうせ自炊なんてしないんでしょう？だから私の家に来なさい。栄養満点の料理を作ってあげるから」

軽く上から目線だったが、あんな優しい笑顔を俺なんかに向けられちまったら行かないなんて選択肢はないぞ。俺は即答だった。

「すぐ行く！楽しみにしてる！」

何か俺は由比ヶ浜みたいだな。なんか馬鹿みたい。

まあそんな事があったって雪ノ下の家に行くことになったのだ。

ドキドキとワクワクが入り交じったこの気持ちを俺は隠せずにいた。

3. 雪ノ下雪乃は積極的である…?

俺は雪ノ下の家でご飯をご馳走になるために家に向かっている。

料理がとても上手で、由比ヶ浜とは比べると月とスツポン、天と地の差ぐらいあるの
で期待しないわけ無い。楽しみすぎてスキップしている。

あれ？これ俺のキャラじゃないな。

とか、アホなことを考えていると雪ノ下の家に着いた。

「何度見てもでけえー」

俺は雪ノ下が体調をこわした時に1回だけここに来たことがあるが2度目の俺は慣れない。だつてでかいもん。大豪邸だもん。

マンションの中に入るには中の人の許可が必要なので、雪ノ下の家の番号を入力する。ピンポンという音とともに雪ノ下に繋がった。

「はい、どちら様ですか？」

「カメラついてて俺の顔が見えるんだからその対応はないだろ」

「あら、ごめんなさい。目が腐っていて知らない人に見えたわ」

「付き合っても態度は変わらないのな」

「ふふ、その方がいいじゃない」

「まあな。早く行きたいからここ開けてくれよ」

「わかった。15階に着いたらインターホン押さずに入ってくれていいから」

「了解」

いつもと変わらない会話を終えると閉ざさせていた目の前の扉が開いた。すぐにエレベーターに乗り、15階のボタンを押す。すると、ウィーンという音がしながら上にあがっていく。たった30秒程の事なのだが、たったそれだけの時間でも雪ノ下に会うのが待ち遠しい。

「ご飯は何かなあ〜と考えていたら15階に着いた。そして雪ノ下が住んでいる「1502」の扉を開ける。

「おじやましませ〜す」

家に入って瞬間に香ばしい料理の匂いがする。予想より遥かにいい匂いなので思わず期待してしまう。

「あら、やっと来たのね。待っていたわ」

「ああ、大学の入学式が終って由比ヶ浜と昼ごはんを食べてたからな」

一瞬怒ったような、怒りの表情が見れたがすぐに見えて可愛らしい笑顔に戻る。

「そう、一緒にご飯を食べていたの」

「そうなんだよ。いきなり高校の話してさーあいつの記憶がいろいろ間違ってたから訂正してたんだよ」

「なるほどね。その話は置いて早くあがりなさい。もう少しで料理完成するから」

「おう」

雪ノ下が猫が付いたスリッパを出してくれたので嫌だけど履いた。なぜ嫌かって？
だって、猫好きだし、履いたら汚いとか言われそうだし。付き合ってたらなかったら絶対言われてたよこれ。

少し待てば料理ができるという事なのでリビングに荷物を置いてからすぐにテーブルに向かった。

サラダがすでに準備されており、とても色鮮やかだ。ドレッシングは俺が家で使うようなやつではなく、手作りらしい。何でも手作りですね、専業主夫志望なのに負けてますよ完全に。

「さあ出来たわよ。どうぞで」

キッチンから出てきた雪ノ下が運んできたのはパスタだった。おそらくカルボナーラだろうか？食欲をひきたてるほどいい匂いが部屋に充満している。

「いただきます」

「どうぞで」

フォークを使って器用にパスタを巻いていく。口に運ぶとクリーミーな味が口の中全体に広がっていく。

「美味しい！」

心配そうな顔をしながらこつちを向いていたのでいつもよりリアクションを大きくして感想を述べた。

その感想を聞くとほっと胸をなでおろした。

「当たり前でしょう。私が作ったんだから」

俺が褒めた途端に急に饒舌になったなおい。感想言うまでは心配そうにこつちを見てたぐせに。

雪ノ下といろいろ話をしたかったがパスタやサラダが美味しすぎて会話するのを忘れていた。

「ご馳走様」

「お粗末さまでした」

「片付けぐらい俺も手伝うよ」

「いいえ、あなたはお客さんなんだから座っておいて」

「あんな美味しい料理を作ってもらえたんだからそのお礼としてそれぐらいさせてくれよ。なっ！」

「そ、そう。そこまで言うなら手伝ってくれても構わないわ」

偉そうに言っているが雪ノ下なりの照れ隠しなのだろう。褒めた瞬間に顔を赤くしやがった。可愛いすぎて抱きしめたくなくなるぜ。

20分ほどかけて皿洗いをした。雪ノ下1人でやった方がもう少し早く終わったかもしれない。俺は手伝いたかっただけなのでその気持ちは察してくれると俺は信じてる。

「手伝ってくれてありがとう」

「いやいや、礼を言うのはこっちの方だ。ありがとな」

「か、構わないわ。後1つだけお願いをしてもいいかしら?」

顔を赤くして俯きながら聞いてきた。何か恥ずかしいことでもさせるつもりなのだろうか。

「俺に出来ることならやるけど?」

「なら、…前で…で」

「え?なに?」

相当恥ずかしいことなのかいつもの覇気が感じられない。

「名前で呼んでくれないかしら?」

「…え?」

全くの予想外だった。もう少し恥ずかしいことをお願いするかと思っていたので少し驚いた。まあ俺が名前で呼ぶのも恥ずかしい事だけだな。

「ダメかしら？」

目をうるうるさせて上目遣いでこちらを見てくる。どこぞの生徒会長ですかね？まあ雪ノ下はあざとくないけど。

「…雪、乃」

「なにかしら？」

「雪乃」

「もう一回」

「可愛いよ雪乃」

「あうう…」

口をぱくぱくしながらトマトのように顔を真っ赤にして下を向いてしまった。雪乃は押しに弱いのか、覚えておこう。

「ありがとう八幡」

「?!」

これも予想外だった。だって俺だけが名前で呼ぶと思っていたら雪乃が呼ぶとは思ってなかったもん。

恥ずかしすぎてめっちゃ熱いぞ。

「お、おう。なら今日はもう遅いし帰るわ」

「そうね、もう10時を過ぎてているもの」

「おう。なら明日も会おうな」

「え、ええ！またね」

「またな」

明日会う約束をして雪乃の家を出た。

ふと、家に帰りたくないなあ〜と思った。

「絶対あいつうるさいぞ…」

あいつとは我が妹の比企谷小町の事である。何か材木座みたいになったな…。

あいつは恋愛関係のことになるといきなりテンションが高くなってめんどくさくなる。

あれこれ考えていても仕方ないので思い足取りで家へ帰ることにした。

4. 比企谷八幡はりア充である 前編

帰りたくないなあ〜という気持ちも抱えつつもようやく自宅へと着いた。

「ただいまー」

「おかえりお兄ちゃん」

玄関までわざわざ来てくれるわけではなくおそらくリビングでくつろいでいるのだろう。

「今日は夕飯要らないって言ったけど、どこ行ってたの?」

ニヤニヤしながらこつちを見てくる。…うぜえ。

こんな顔をするという事はある程度察しは付いているのだろう。

「大学行ってその後に由比ヶ浜と昼飯食いに行つて、夕飯は雪乃の家で食べたよ」

「結衣さんと雪乃さん…っええー?!何で名前で呼んでるの?!今までは呼んで無かったよね?!」

「落ち着け。飯を作ってくれたお礼をしたいと言ったら名前で呼んでほしいと言われたから呼んだだけだ。あくまでもお礼だからな」

「ふーん。」

「またもや何かを察したような顔をする。

あの顔ムカつくなく。

「どっちが本命なの？」

ほらやっぱりこういう質問が来る。俺としてはあまり言いたくないが火がついた小町は止めることが不可能に近いので渋々答えることにした。

「雪乃だよ」

「やっぱりね。名前で呼んだ時点でそんな気がしてたよ」

え？わかってたの？

なら聞かなくてもよかったよね？こんな恥ずかしい思いをしなくてもよかったよね？

小町のやつ妹だからって。

「んで、どっちから？」

「え？それも答えないといけないの？」

「あつたりまえじゃーん！」

いやーこの質問が来るとは思っていなかったですよ。本当のことなのに雪乃からなんて言ったら信じてもらえないんだろーうな。

「…はあ。雪乃からだよ」

「雪乃さんから?! あんな美人に告白されるなんてすごいね! もう一生ないよ!」
予想通りだった。

まあ小町の言っていることは一理ある。あんな美人から告白されることなんてこれから先ある訳がない。てか、もしあつたら今度は信じられるかすら怪しいまである。

まあこれからずっと一緒にいるわけだから雪乃以外のやつに告白されるわけないけどな。あ、今の八幡的にポイント超高い!

あれ? 本人より先に関心の中で言っちゃった。テヘツ☆
「俺も最初は信じられなかったよ」

「さすがお兄ちゃん。いや、ごみいちゃん。まあそれでも小町の大切なお兄ちゃんなんだけどね! あ、今の小町的にポイント高い!」

「はいはい、嬉しいよ〜」

「適当だなあ。あ、さっさとお風呂入ってよ! 小町も入りたいから」
「へーい」

小町に促されるように着替えを待ってお風呂場へと行った。

お風呂に入ると今日あったことが鮮明に思い出された。

由比ヶ浜と昼食を外で食べたことも珍しいが、やはり雪乃と一緒に居た時間の方がとても心地よく感じられた。

まずプロ顔負けの料理を短時間で作り上げ、俺の胃袋を捕まえた。その後の名前で呼ばせることによって心を盗まれた。

あのコンボはずるい。叶わない。

でも、雪乃と一緒にいるだけで心が落ち着く。俺と雪乃はけして話す方ではないがあの無言の空気が息苦しい訳ではなく妙に心地よい。

あれが俺の求めていた本物だと言うやく今確信できた。

あまりにも雪乃のことを考えていると長風呂になってしまうのですぐにあがろう。

風呂からあがった俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して部屋へと持っていく。

部屋に戻ると携帯がぶーぶーと鳴っている。誰からか確認すると雪乃だったので出ることにした。これが由比ヶ浜とかだつたら無視するかもしれない。

「もしもし」

「八幡かしら？今時間ある？」

「名前で呼ぶのは慣れたんだな雪乃。全然あるぞ」

「わざわざ指摘しないでちょうだい！」

雪乃さん照れてますね。顔を真っ赤にしている様子が脳裏に浮かび上がる。

「どうしたんだ？」

「今日会えたからもっと話したいと思って。会うのも良いけど電話もいいでしょ?」

「そうだな。俺も話したいと思ってたから良かったよ」

「そ、そう。それで明日の予定はどうしましようか?」

「この辺散歩するとかでどうだ?」

「1人だったらつまらなそうだけど八幡と一緒にならどこでも構わないわ。そうしましよ
!」

「お、おう。雪乃って電話だとちょっと強気になるな」

「そ、そんなことないわよ!八幡も同じでしょ?」

「それはどうかな?明日楽しみにしといてくれ」

「ええ、デートも楽しみだけど、あなたの行動も楽しみにしておくわ」

「おう。もう遅いし寝るか」

「そうね。ならまた明日。おやすみなさい」

「おやすみ」

お互いに挨拶をしてから電話を切った。

好きな人との、彼女と電話をしていると時間の流れがいつもの2倍以上も速く感じられる。相対性理論?とかいうヤツだな。

明日も雪乃と会えるかと思うと寝れる気がしない。アニメ見て眠気に襲われるまで

見るか…。

結局寝たのは5時過ぎだった。次の日が楽しみっていう感覚がつい最近まで無かったせいでこの気持ちの恐ろしさを知らなかった。次からは用心しよう。

ふと時計に目をやると10時過ぎだ。入学式の次の日は色んな理由があるおかげで今日は学校は無い。

雪乃早く会いたいなど思っていると会う時間を決めて無かったので携帯で確認してみる。何やら1通のメールが届いてたからだ。差出人はもちろん雪乃だった。

『昨日は嬉しくて時間を伝えるのを忘れてしまったわ。2時ぐらいに駅で集合でいいかしら?』

なぜだかいいいなあーと思いつつ雪乃にメールを返した。

『了解』

これ以上打つと照れて変なことを言いそうなので辞めておくことにした。まだ時間があるなと思いつつベットに入ってもうひと眠りする事にした。

5. 比企谷八幡はりア充である 後編

昨夜は5時に寝たので2度寝をしてしまった。いや、夜じやなくて朝だった。

そろそろ起きようかなと思つているとある異変に気づいた。明らかに毎日使つてい
る枕の心地よさが今は何倍にもなつてゐる。心地よさの理由を探すために枕に目を
やつた。そこには枕ではなく綺麗にすらつとのびた足があつた。

「あら、ようやく起きたかしら？」

今度は枕ではなく上を向くと俺が知っている人物が目の前にいた。それは紛れもな
く雪ノ下雪乃であつた。雪乃が家に居るのはありえないのもう一度目を閉じること
にした。

——い、痛い

「なぜもう一度寝ようもしてるのかしら？ わざわざ可愛い彼女が待ち合わせ場所に来な
いから起こしに来てあげたのに」

痛いということは夢ではないということ。待ち合わせをしているという事は夢では
なく現実ということ。何が起こつているのか全くわからない。

「待ち合わせの時間つて2時だよな？ 今何時だ？」

「もう3時よ。2時半までは駅で待っていたけど来なかったから何かあったんじゃないかって心配になったの。まずは八幡の家に行つていろいろ聞こうと思つたらあなたはデートをほつたらかしにして寝ていたの。でもあまりにも気持ちよさそうな顔で寝てたから起こすのはやめて膝枕をしてあげたの」

よく今の長いセリフを噛まずに言えたなあ〜と思いつつ1つ疑問に思つたことがあつた。

「膝まく……らっ?」

「ええ、膝枕よ」

その疑問は一瞬にして消え去つた。俺はいつの間にか雪乃に膝枕されていた。なぜ今まで気づかなかつたんだろうと不思議に思うほど違和感がなかった。

さつきまでは膝枕をされていたという事実は知らなかったから何にも思わなかったが、今は違う。はつきりと俺自身が理解してました。

わかつてから異常に顔が赤くなつていくのがわかる。

「な、なんで膝枕してるんですかね?」

恥ずかしい質問だが理由をとにかく知りたかつたので聞いてみることにした。

「答えると言われると難しいけど、強いていうならあなたがデートをすつぽかしたバツかしらっ?」

雪乃はこう言っているが俺にとってはお褒美に近い。他人が周りにいればさすがに嫌がっただろうが今は家の中には小町すら居らず俺と雪乃の2人きりなのである。これ以上に嬉しいことはない。これはチャンスだ…!!

「バツか…。俺はこんな可愛い彼女に膝枕なんてしてもらえてるんだからバツじゃなくてお褒美だな！」

「え、ええ、そうね」

「しかもこの位置からなら雪乃の顔をずっと見てられるからな幸せだよ」

「ししし幸せなら何よりよ」

「可愛い」彼女の顔が見られて最高だよ」

「あううー…／＼／」

雪乃は押しに弱い。しかも可愛いという言葉を連発すると効果てきめんだ。

雪乃は顔を真っ赤にしながらか口をぱくぱくさせている。この表情を見るとほんとに照れているとわかる。そして何より愛おしい。

「?!」

雪乃はびつくりしたような顔を見せた後顔がゆるんだ。

俺が立ち上がり背後から雪乃を抱きしめたからだ。

「ど、どうしたの?」

「デートに行けなかったから謝罪の気持ちを込めたのと、さつき膝枕をしてくれたお礼だよ」

「そ、そう。その、ありがとう」

「どういたしまして」

「…」

「…」

それつきり2人は無言になってしまったがやはりこの雰囲気は俺は好きだった。無理に話そうとしなくてもいい、会話を続けようとする努力をしなくてもいい。何よりも雪乃を近くで感じられる。俺はこの空間が本当に好きだった。

雪乃といつまで一緒にいられるかは俺にはわからない。こいつの家は厳しいことを俺はわかってている。でも、雪乃が俺から離れていくまで俺はそばに居続けたい。ずっと近くで雪乃を感じていたい。

その気持ちで雪乃を抱きしめる腕に力が入ってしまった。

「は、八幡。ちよつと痛い」

「わ、わりい」

「でも私のことを大事にしてくれているのはわかるから今回は許してあげるわ」

「ふっ…相変わらず変わらないな」

「そう簡単に人は変わらないって言ったのはあなただったでしょう?」

「そうだっけか? 昔のことなんてあんまり覚えてないさ。いや、覚えてることとしては雪乃に罵声を何度も浴びせられたことなら覚えているぞ」

「今もしてほしいのかしら?」

「いいえ、やめてくださいお願いします」

「ふふつ、あなたも昔と変わってないじゃない」

「変わってないよ。いや、これからも変わらないよ」

「そうね。これからもよろしくね? 八幡」

「もちろんだ」

2人の愛を確かめるようにキスをした。大学生で初キスというのはどうなのだろうか…。

分時間か何時間かわからなくなった時に雪乃は爆弾を投下してきた。

「私、今日は八幡の家に泊まるから」

「へ?」

「泊まるから」

「え? でも今日は…」

「親は居ないんでしょう? あと小町さんは友達の家泊まると言っていたわ」

両親が共働きで今日は帰ってこないと言っていた。

それは誰からか聞いたんでしょうか？俺がこんなことをするはずはないので心当たりはひとつしかない。

そいつに情報を聞き出すために電話をしようとしたらメールがそいつから届いた。

『今夜はオールナイトだね☆』

やかましいわ！

本当にJKですか？いいえ、中学生が言っているようにしか感じません。

「小町から聞いたのか…。まあいいよ」

「本当?!ありがとう!」

雪乃は満面の笑みで俺を抱きしめる。

この笑顔を見れるものなら安いものだな…。

「じゃあよろしくね?」

「おう」

この後いろいろな事件が起こるのだがそれはまた別のお話である。

6. やはり俺の後輩はあざとい

あれこれあった4月だなあと振り返る。いや、3月からか。

3月には雪乃に告白され、4月になったら雪乃とデートに行き、デートをすつぽかしたら家に来たりその後お泊まりしたり…。

あれ？全部雪乃が関わってるじゃん…

俺の人生に雪乃が関わり出してから、忙しくなったが中学生の頃と比べると圧倒的に楽しくなった。それは今でも変わらない。

俺の気持ちは置いといて今は大変な状況に立たされている。なぜなら俺の目の前に元総武高校生徒会長一色いろはが目の前にいるからである。

今の状況を説明するには少し時間が必要だ。

俺は大学で受けたい講義がどうか、必要な講義がやると知っていたので朝早くから講義を受けた。

適当にやったメモしつつ90分×2の講義が終了した。

時計に目をやると12時を回っている。家に行けば何かあると思えば家に帰ることに

した。

大学へは電車を利用していてももちろん帰りも電車を利用する。ガタンゴトンという音を感じながら気づけば駅についていた。そのまま次の駅に行ってもいいがすぐにご飯が食べたかったので急ぐことにした。電車から降り、改札口を抜けると何となく知っているような人を見かけた。こんな所で話しかけられても時間を取られるだけなので向こうが気づかないようにそつと外に出ようとした。だが、その行為は無駄だったらしくすぐに相手は俺の姿を見つけて近寄ってきた。その相手が一色だった訳だ。

「せーんばい♪」

「お、おう。どうした？俺は忙しいから帰るぞ」

「せっかくこんな可愛い後輩に会えたんだからもっと話ぐらいしてもいいじゃないですかあ〜」

「俺はこの後帰ったら予定…」

「帰ったら暇ですよ？だったらそのカフェで少し話しませんか？後、ご飯も食べてないのでペコペコなんですよ〜」

「ちなみに拒否権は…?」

「ないです!」

「はあ…まあ俺もご飯はまだだしいいぞ」

「やったあ♪」

そういう事で一色と一緒にカフェで話すことになった。正直帰ってゴロゴロしたかったが一色は俺の言うことを聞いてくれなきそうなので渋々付き合うことにした。

「そういえばどうして駅になんか居たんだ？今年受験生だろ？5月とはいえ今からコツコツやらないとこのちのち苦労するぞ」

そういえば一色は俺の一つ下だったことを思い出し、俺も受験生だったなあーと思っただが、俺もこの時期はやってなかった。やる気がなかった。

「やだなあ〜ちゃんとしてましたよ。家の近くだと友達に会ってそのまま遊びに行っちゃうから集中出来ないんですよ」

あざといあざとい。

そんな表情をコロコロ変えなくても説明できるだろ、っと心の中でツツコミつつ一色の勉強に対する意欲は感心する。この時期から勉強をするという事は相当難しいところなのだろうか？

「どこの大学を受けるんだ？」

「〇〇大学です」

ふむふむ。

なかなかレベルが高い大学を受けようとしてるなー。

あれ？なんか聞いたことあるぞ？

「え？俺と一緒にの大学？」

「はい、そうですよ！」

意外だった。確かこいつは理系だったはずだ。だが俺の行っている大学は文系の中でも頭一つ飛び抜けている。理系が得意なのにわざわざ文系の大学を狙う理由は何だろうか。

「お前って理系だったよな？なんで文系に変えるんだ？」

「まあいろいろと理由があるんですよ。でもあんまり点数がのびないからこうやって早い時期から受験勉強を始めてるんですよ？」

「そ、そうか。まあ頑張ってくれ」

何か嫌な予感があったのでここで話を終わらせることにした。

「そこで1つ提案なんですけど」

嫌な予感も的中して、話を終わらせることも失敗しました。テヘツ☆

「先輩って国語得意でしたよね？」

「まあ常に学年3位だったからな」

「その腕を見込んで頼むんですけど…」

「ま、まさか」

「国語おしえてください!」

「やだ」

「そ、即答?! 酷いじゃないですか。せめて断るにしても少し間をあけてからとか…とにかく酷いです!」

頬をふくらませて激おこだよ!ということを表しているんだろうか? やはりこいつはいつまで経ってもあざといままである。

「とにかくやだ」

「せんばーい。おねがいますよお」

目をうるうるさせてこちらを見ている。どうやら仲間に…

ゴホンゴホン。

こんな風な顔をした一色に頼みごとをされるのはいつの事だろうか。久しい感じがするが、実際は3〜4カ月ぐらい前なのだ。昔のように感じていたが意外とそうでもなかった。

「はあ…仕方ねえーな」

「いいんですか?」

「おう。誘うなら土曜日限定と昼からにしてくれ。それだけは曲げられない」

「なんかめんどくさい条件ですが、せんばいが直々に勉強を見てくれるというのならそ

の条件も呑んであげないこともないでしょう」

「おい、そんな上から目線だと見てやらねえぞ」

「じよ、冗談ですよ。本気にしないでください」

「はいはい、なら今度の土曜日の昼な」

「了解です！」

「俺は今から本当に用事があるから気をつけて帰れよ」

嘘じゃなくてほんとだよ？家でゴロゴロするっていう用事がありますからね。

「仕方ないですねえ。ならまた土曜日に」

「お、おう。ならまたな」

「はいー！」

こうして一色の勉強を見る約束を交わしてしまった。

しかし、非常にめんどくさい事になってしまった。これから俺の土曜日は基本一色の勉強を見なければならぬ。つまり潰れてしまつて俺の休日は一日だけになってしまつてしまった。

確かに辛いことだが、自分の後輩が俺と同じ大学を受験しようとしているのなら手伝う意外方法はないだろう。

俺もあいつのために頑張るか…

7. 俺の休日は潰れる 前編

早速というか勉強を見てやると言ったその週の金曜日に一色いろはからメールが来た。

『せんぱーいどーもです（・・▽・・）ノ 明日の土曜日何ですけど暇ですか？暇ですよね？勉強見てください（◇人へ＊）お願い!!!』

こんな感じのメールだった気がする。

まず一つ言いたいことは、俺の予定なんてまるつきり無視されているということだ。確かに休日暇なことは否定はしない。だが、一度でいいから俺の予定を決めつけずにちゃんと誘ってほしい。

あともう一つ。顔文字なに？俺使わないからわからないけど今なんて女子はこんな使うの？雪乃とメールしてるけど顔文字なんて使ってる所見たことないよ？見たら引くまであるけどね、

一応一色も女の子なんだなあゝあざといけど。

とりあえず一色に返信する事にした。

『了解。どこかで勉強する?』

俺はいつもこんな感じだ。だって余計なこと書かなくていいし、会話膨らまないし…寂しくないよ…うん。

悲しい気持ちになりかけた時に一色からすぐに返信が来た。

『1時に駅でどうですかσ(？・？)？』

もう反応はしないし、つつこんだりはしない。

『了解。ならまた明日な』

『もう少しせんぱいとメールしたかったのに…(＞|＜) 仕方ないですね。ゞ(*´・

ω・*)おやすみなさあ〜い』

何で若干あいつの方が立場が上なの？別にいいけどね、そんなちっぽけなことじゃ心の広い比企谷八幡は怒らないから。

ともかく非常にめんどくさいをしてみましたと今更ながら公開している。やっぱり断るべきだったか…

明日はあんまりゴロゴロ出来ないから今のうちに寝て体力を貯めとくか。

ジリジリ〜

大きな音を立てながら目覚まし時計が鳴っている。それを止めるために布団から出ようとするが布団の心地よさから出ることができない。しかし、約束がある事を思い出し仕方なく出ることにした。時計を見ると11時だ。約束の時間までは全然余裕があ

るが、ご飯食べた、服を着たりと準備しなければならぬので2度寝するのは辞めておこう。とりあえず眠気覚ましのためにリビングでコーヒーを作ろう。

リビングに行ってみると朝食の準備がしてあった。作ったのは小町のだろうか？朝食の横に置き手紙が置いてある。

『小町は出かけるからご飯作ってあげたよ！お兄ちゃんのためにね！あ、今の小町のポイント高い！昼ごはんは自分で用意してね』

朝食を作ってくれていたのは助かったが、昼食無いのがなあー。いや、今は11時だからこれを昼食として食べればいいんだ！八幡あつたまいー！

とりあえずコーヒーを沸かすことにする。もちろんマツ缶が好みなので同じがそれ以上に砂糖を入れる。今だけ入れないと美味しくもないよな。別にブラックが飲めない訳では無い。マツ缶を愛しているから自分でコーヒーを入れる時でも砂糖をたくさん入れてしまうのだ。マツ缶は千葉県なら誰でも大好きだからな！ここ重要。

ふう。これを飲むと目が覚めるぜ。覚めると言っても腐った目が治るわけではない。ましては緩和されるわけでもない。これはもう治らないと思ってるから気にしていない。

起きてからしばらく経つので小町が作ってくれていた朝食を昼食代わりにした。

うまい！あいつはいつもはあんなアホだけど料理とかは本当に美味しい。親が共働

きで料理を兄妹で作っていたがしばらくしてから小町1人で作っていたので料理スキルはグングンど上がっていた。俺も作れないことはないが小町と比べられるとなんとも残念な感じになる。ここで雪乃を出してしまうとレベルが違いすぎるので比較はしないことにする。

小町が作ってくれたものを感謝しつつ食べ終えた。気づけば12時を回っている。遅刻するのは嫌なので適当に服を選んですぐに家を出ることにした。

早めに帰れるといいなあ〜と思いつつ、駅へと向かった。

8. 俺の休日は潰れる 後編

適当に服を選んでたら思ったより時間がかからなかったので早めに家を出たようだった。現在12時半。一色の事だからどうせ1時になるまで来ないだろう。適当に時間を潰そうかなあ〜と思つていたら声をかけられた。

「せんぱーい！遅いですうー！」

振り返ると気合い充分というか、今からデートに行くんです！みたいな格好をしている。俺はファツションが苦手なので説明出来ないがとにかく凄いです。

「早いな。俺も早く家を出たつもりだったが」

「せんぱいとデ：勉強を教えてもらえるからはりきつて準備してたら早く家出ちやいましたー！」

「そ、そうか。なら行くか」

「はいー！」

そう言つて隣町にある図書館を目指し、電車へと乗り込んだ。

俺としても近場の図書館がいいのだが、なんせ知り合いに会いそうで怖いのである。一色と一緒にいるところを見られたら何を言われるかわからないし、きつと一色に振ら

れるだろう。まあ俺はちゃんと可愛い彼女が居るから振られてもなんにも思わないけどな!

しかし、電車の中は狭い。休日のお昼なら空いてると思ったが全く違った。おかげで一色に壁ドンをしているみたいになっている。知らない人が見たら通報されそうだ。

「せ、せんぱい。どうしてこんなことしてるんですか?!」

「俺だつてしたくないけど満員電車なんだから仕方ないだろ…」

「仕方ないから我慢してあげます」

「あ、ありがとうございます…」

最後まで敬語になつちまつたよ。確かにこんな体勢は一色からしたら心底嫌がるよな。一色の方に目をやると顔を赤くして下を向いている。恥ずかしがっているのか? いや、そんなことは無い。こいつは葉山の代わりとして俺はこいつにいろいろと付き合っていた。練習相手になつたかということに対しては疑問ではあるが…

「…」

「…」

互いに気まずくなつてしまったので何も話さなくなつてしまった。下手に会話するよりこうして静かにしていた方が俺は落ち着く。

しばらく沈黙が続くうちに目的の駅に到着しそうだった。

『次は〇〇〜』

「も、もうすぐだな」

「は、はいそうですね」

「…」

「…」

これ以上会話が続かない。いくらなんでもこの雰囲気は俺も苦手だ。どうしようかと対策を考えていたらようやくやく到着した。

「やっと降りられた…」

「ただ電車に乗っただけなのに何だかとても疲れました…」

「俺もだ…」

とりあえず今日の目的は図書館で勉強する事なので向かうことにした。

「とりあえず行くか」

「はい、行きましよう！」

疲れたあーとか言ったくせに急に元気になった。どこからが演技でどこからが本気なのか全くわからない。まあ分かってても何かをするという事は無いが。

図書館に向かってる最中は相変わらず無言だったが5分程度歩いた所に図書館があった。

「ここですよー！」

「なかなかデカイな。」

「そうですねー。少なくとも家の近くの図書館よりは断然大きいです！」

何故か胸をはって私すごいでしょー！みたいな顔をしてるが全く関係ないだろ！と心の中でツツコミを入れつつ勉強を始めることにした。

「俺は本を読んでいるから何か分からないことがあったら聞いてくれ」

「了解です！」

一色はすぐに勉強に取りかかり始めた。意外と集中しているように見えたがすぐに分からないところがあつたらしく俺に尋ねてきた。

「ここってどういう事ですか？」

「ここはだな……」

国語はなんといっても高校生の頃は学年3位だったので勉強しなくても余裕で説明出来た。だが、数学において最初は由比ヶ浜に負けるほど点数が低かったので今でも無理である。努力したおかげなのか70点付近までは上がったが。

それからわからない所があれば俺に聞き、それを答えるという単純作業を繰り返していた。同じことをずっとしていたので眠くなった時に一色に声をかけられた。

「せんばーい。お腹空きませんか？」

「んーまあもう3時だからな。多少はな」

「私クッキー焼いてきたんですけど、食べませんか？」

「甘いもの食べた方が集中出来るからそうするか」

「なら外に出ましょ♪ここじゃあ飲食禁止ですからね」

「おう」

クッキーを食べるために図書館の外に出た。

確か由比ヶ浜ほど料理が下手くそなやつは俺の周りには居なかったはずなので大丈夫なはずだ。

「どうぞー！せんぱい！」

「お、おう。ならいたadakします」

一色が作ってくれたクッキーを口に運ぶ。

ポリポリという食感と共に程よい甘さが口の中に広がる。もう少し甘い方がいいが、これでも美味しいので文句は言わない。

「美味しい」

「本当ですか?!」

「ああ。めっちゃ美味しいぞ」

「よ、よかったです…」

一色は安堵の表情を浮かべている。やはり自分が人のために作った物を美味しいと言われれば俺であつても嬉しい。俺のためというのは分からないが。

あまりの美味しさに全て俺が食べきってしまった。

「すまん。全部食べちゃった…」

「いいんですよ、そんなに美味しく食べてくれたなら私もそれだけで充分です！なら図書館に戻って勉強に戻りましょうか」

「ああ、そうだな」

何故かは分からないがさつきよりもやる気に満ちた顔をしている。どうしたんだろ
うか？俺にはわからない。

クツキーを食べる前と同じような方法で勉強をしていた。たまに雑談を挟むようになつたが。

一色があまりにも集中しているので時間を見ていなかったがもう6時過ぎだ。意外と時間が経っている。

「もう晩飯の時間だし帰るか」

「もうそんな時間ですか？なら帰りましょうか」

テキパキと片付けを始めて図書館を出て、徒歩5分の距離にある駅へと向かった。

駅に着くと運良くすぐに来そうな電車があつたのでそれを待つことにした。

「それにしても意外と一色は真面目だよな」

「な、何ですかいきなり」

「素直に褒めてるだけだよ」

「わ、私の好感度上げて何かしようとしてるんですか？ごめんなさい、発想はいいですが、まだまだ甘いですごめんなさい」

「大学生になっても振られちゃうのかよ…」

「当たり前です♪」

早口で振られると高校生の時のことを思い出す。

告つても無いのに何回も振られてたなあ頃は…

「せんばい」

さつきと打って変わって真面目な表情になった。

「何だ？」

「あのですね…」

「…」

「駅についたら話します」

「…わかった」

さつきとは違う雰囲気は何を言うとしても詰まりそうで何も話すことが出来ない。

そのまま駅に着き、そのまま改札口を出た。

「せんぱい」

同じ表情で俺のことを見つめる。

「何ただ？」

「私は…奉仕部の部室の目の前でせんぱいが本物が欲しいと言っていたのを聞きました」

「おう」

「今頃になってやっと本物の正体が分かりました」

「…」

「わ、私はせんぱいの事が…」

俺はこの後のセリフを聞きたくない。聞いてしまったら断るしかなくなるからだ。それ以外になんと対応したらいいのかわからない。

「ここで何をやってるのかしら？」

冷たく小さい声だったが何故か周りに響くような声だった。その声の主は雪乃だった。

「ゆ、雪乃…」

「…呼び捨て？そんな仲だったんですか…」

何やらぼそぼそ言ってるがとても小さな声なので何を言ってるのか聞こえない。

「八幡。ここで何をしているのかしら？」

「一色の受験勉強を手伝っていたんだよ、本当だ。」

「せんぱいに手伝ってもらってました。私は国語が苦手ですんぱいは得意なので……」

「そう。私は怒っているのよ八幡。」

「わ、分かったよ…… 今度説明するから」

「今から！」

「は、はい……」

「まあそういう事だからまたな」

「はい、また今度……」

俺と一色は別れた。

はつきり言つて雪乃が現れたのは助かったが、今までの状況を説明するのは非常に難しい。だが、説明しないと雪乃は起こったままなのだから仕方ない。

無理やり雪乃に歩かせながら雪乃の家へと向かった。

——いろは side

名前で呼びあつただけで2人の関係がすべてわかつてしまった。告白するつもりだったが雪ノ下先輩が出てきてくれて本当に良かった。出てこなかったら私は絶対に

振られていたから…。

関係がわかったからと言ってアタックをやめるつもりは無い。雪ノ下先輩は到底叶う相手ではない。でも、私は諦めたくない。初めてあんなにも人を好きになつて頑張つて振り向かそうとしたから…

これからもつと頑張ろう。雪ノ下先輩からせんぱいを取るように。由比ヶ浜先輩に負けないように…

私はその夜涙が止まらなかつた。

9. 雪ノ下雪乃は比企谷八幡を追い詰める

俺は雪乃に掴まれながら雪乃の家に到着した。

やはり怒っているのだろうか……。怒らないはずがない。俺がもし雪乃の立場になったら今まで無いほど怒るだろう。そのまま捨てるかもしれない。もしかしたら俺は捨てられる…。

「説明してもらいましょうか。」

「は、はい。この発端は…」

何から何まで包み隠さず雪乃に説明した。どうして一緒にいたのか、一緒に行動をして何をやっていったのか…

雪乃に信用してもらうために全て話した。これで雪乃に信じてもらえるかは分からないが、信用してもらえるように今は願うしかない。俺がここで何を言っても所詮は雪乃からしたら『嘘』になつてしまふので俺は何も言えない。だが一つだけ言えることをちゃんと心に届くように伝えようとした。

「俺は何があつても雪乃が好きだから…それだけは信じてくれ」

雪乃は冷たい顔をしてこちらを見ている。こんなことで許して貰えるとは思つてな

いがやはり別れを切り出されそうで怖い。

「事の経緯は分かっていたわ。でも貴方は私と付き合ってるのに他の女性と2人でお出かけなんてダメだとは思わなかったの？」

雪乃の言っていることは正論だ。反論の余地はない。だから俺は事実だけを伝える。

「俺は雪乃が好きだ。だから一色や他の女の子に惹かれるつもりは全く無い」

「…」

？
どうしたら雪乃に信じてもらえるのだろうか？どうしたら分かってもらえるのだろうか？

俺にはその方法が分からない。

「貴方は一色さんに対して好意は抱いて無かった、ということね？」

「ああ、天に誓ってその通りだ」

「そう…」

すぐに雪乃は泣き出してしまった。

「本当に悪かった。泣かないでくれよ」

俺は子供をあやすように雪乃をそっと抱きしめ、頭を撫でた。

「?!…もう少しそのままですて…」

「気が済むまでいつまでも…」

「…」

「…」

10分ぐらいお互いに無言だった。すると雪乃が泣いた理由を説明し始めた。

「怖かった…貴方が他の女の子といて…由比ヶ浜さんならまだしも、明らかに貴方に気があつた一色さんが貴方と一緒にいて…心の底から怖くなつてしまつた。その気持ちさをさらに強くするかのように一色さんが貴方に…八幡に告白しようとした。それを最後まで見ていたら受け入れてしまうんじゃないかと思つたから言葉を遮るようにして私俺は止めたの。あそこで八幡が受け入れたら私はその時点で捨てられると確定するから…そんな瞬間は見たくなかつたの…」

言い終えたらまた泣き出してしまつた。

雪乃も不安だつたのだ。俺と同じように。今回は完璧に俺が悪いので雪乃は俺よりも数倍怖かつたと思う。

「悪かつた…。でも俺から捨てることなんてない。俺は雪乃を愛しているから」

俺は雪乃を安心させるように優しい声で語りかけるように雪乃に囁いた。

「私こそ八幡のことを愛しているわ。この世界で誰よりも」

雪乃を優しい笑顔で言ってくれた。

俺の囁きに応えるように俺のことを思ってくれていた。俺は本当に嬉しかった。

俺は心からこの優しくて、俺からしたら眩しいこの笑顔を守りたい。誰にも渡したくない。取られたくない。

もう一度気持ちを確かめるように雪乃に言った。

「好きだよ雪乃」

「私もよ八幡…」

俺らはお互いの気持ちを確かめるようにキスをした。1回ではなく何回で、互いに安心するまで…

俺は今までずっと夢かと思っていた。雪乃が俺に送ってからずっと。こんな夢も楽しくて幸せで良いなあと思った。でも、この事件を通して1つわかった。

——これが『本物』なんだ。今まで求めてきたものがやっと、本当に手に入ったんだ…

俺は泣いてしまった。雪乃が居ると実感出来たから。

「どうして泣いているの?」

俺の顔をのぞき込んでくる。いきなり泣いたので心配しているのだろう。

「いや、こんな可愛い彼女が俺のことを想ってくれているなんて本当に幸せなことなんだ、って考えてたんだよ」

「私も嬉しかったわよ。私のことを考えていることがちゃんと分かったから」

「あ、いや、そのなんだ……これから一緒にいような」
「もちろんよ」

俺は雪乃の家で一夜を共にした。色々あつてつかれたのか2人で一緒にベッドに入ると俺と雪乃はすぐに眠りについてしまった。

10. 2人はデートする 前編

俺は今遊園地に来ている。何故かって？それはこの前の謝罪を込めてだよ。確かに雪乃は優しいから許してくれた。だが、心の中ではまだ不安だと思う。もし雪乃が葉山となんか一緒に居たら俺は間違いなく捨てられたと思うだろう。このデートは雪乃への気持ちをはっきり伝えて信用を取り戻すという意味もある。ギスギスしたままではいい感じはしないからな。

「楽しんでるか？雪乃」

「貴方ね…今来たばかりで何も乗ってないのに楽しいわけじゃないでしょう？」
俺の方がテンション上がってるみたい。

この罵倒はいつものように戻った感じがして少しだけ安心した。
俺がMという訳でないぞ？ノーマルだから。

「まず何から乗ろうか？」

「そうね、まずはあれかしら」

雪乃が指を指した先にあったのはコーヒーマグだった。あれはやばいぞ…何か想像できてしまう…。

「お、お前はたくさん回しても大学生なのか?!

「え、ええ。何をそんなに焦っているのかしら?」

「あ、焦ってねえーし」

「そう…」

俺が何を考えているのか分かったようだ。こちらを向きながら小悪魔のように笑っている。そんな表情を見ているのも美しいの一言です。本人に直接は言えないですけどな。

雪乃に引つ張られ乗ったが回され過ぎで気持ち悪い。回した本人は何故か乗る前より元気になつている。俺はノーマルだけどあの人は絶対にSだなそれ以外ありえない。でも楽しそうでもよかった。歳相応の笑顔を見せながらめっちゃ楽しそうだった。見ているこつちですら笑顔になるほどだ。

「何ニヤニヤしているの?気持ち悪いからやめなさい」

ただ雪乃の笑顔を見ていただけなのにこんな事を言われたら結構傷つくが今回は何にも言わなかった。俺を罵倒するその顔も優しい笑顔だったから。

俺は雪乃にやり返そうと思い、ジェットコースターを誘うことにした。あいつは確か苦手だったからな。確かお化け屋敷も…

「これは面白くなりそうだな。」

「変な事考えてないでしょうね？」

「そんなこと考えてないよ」

「さらつと心を読まれた。」

「そんな能力あるの？俺も欲しい。」

「なあ次はジェットコースター乗らないか？」

「え？いや私は…」

「今空いてそうだし速く行くぞ！」

「わ、わかったからそんなに急がないで」

「思った通りだ。ジェットコースターに乗ろうと提案した時に顔が少しだけ引きつったし、断ろうとした。これは苦手とみて間違いないだろう。」

「ううー…」

「大丈夫か？」

「今はジェットコースターが上に上がっている途中だ。もう少しすればものすごいスピードで落ちていくだろう。」

「う、うわい…」

「相当怖いのか無意識のうちに俺の袖を掴んでくる。それでも怖いのか顔は強ばった」

ままだ。

その恐怖を和らげるように手を握った。

「大丈夫だ。こうしてれば大丈夫だろ？」

「ふっ…貴方もそんな臭いセリフが言えるようになったのね…八幡の手を握ると少し安心できる」

「雪乃と付き合ったおかげだな…」

俺が言い終わるとジェットコースターは急降下した。

「きゃあー！」

「い、痛い…」

俺の手を握る力が恐怖心に比例してるのかどんどん強くなっていく。痛いので離したいが、隣の雪乃の表情を見るとそんなことは出来ない。ジェットコースターが降りるまで握った手は離さなかった。

ジェットコースターを降りてからすぐにベンチに座った。

「き、気持ち悪いわ…」

「すまんな、水買ってくるから待ってろ」

俺がベンチから立ち上がろうとすると俺を引き止めようとした。

「私も行くわ…」

「気持ち悪いんだろ？俺が買って来るから待つてろ」

「お言葉に甘えてお願いするわ」

1人で居るのが不安なのだろうか。すぐ近くにある自動販売機で水を買って走って戻ろうとすると知らない男性数人に囲まれていた。

「ねえねえー俺らと何か乗らない？」

「私は彼氏と来ているのだから他の人とは行きたくないの」

「彼氏？そんなのほっといていこーぜ」

雪乃は体調が悪い影響からなのかいつもより覇気が無い。そのせいで追い払えてない。

男が無理やり手を掴もうとした所で俺は止めに入る。

「おい、俺の彼女なんだから辞めてくれよ」

「あ、彼氏来ちまった。やめとくかあ」

俺が出てきたことで大人しくどこかへ行ってくれた。このまま実行使に持ち込まれていたら完璧に負けていた。内心少しほっとした。

俺は雪乃に何かされて無いか心配で声をかける。

「大丈夫だったか？」

「ええ。八幡が来ると分かっていたから大丈夫よ」

「そ、そうか…ほら水買ってきたぞ」

「ありがとう」

目の前でそんな事言われるときすがの俺でも照れてしまう。いや、他の男であっても素直にこんな可愛い彼女に褒められたら素直に嬉しいだろう。あいつが他の男を褒めることはこれから無いと思うが。

「体調は良くなつたか？」

「おかげさまでね」

「ならばどこ行こうか？」

「八幡と一緒にならどこへでも行くわ」

雪乃は俺の手を握った。俺はその嬉しさからか自然に恋人つなぎをした。握った手から雪乃の優しさを感じられて心の底から暖かくなった。

11. 2人はデートする 中編

コーヒーカーップ乗ったり、ジェットコースター乗って気持ち悪くなったりと…いろいろな事をしていたので気づけばお昼になっていた。

「そろそろ良い時間だし、どこかで食べないか？」

「ちよ、ちよっと待ってくれるかしら」

今も雪乃と手を繋いでいるので雪乃が止まると俺も自然に止まる。

不思議に思ったので雪乃の方を向くと顔を赤くしながらモジモジしている。

「どうした？」

「その、あの…」

最初はうっすら赤かったのが今はトマトのように赤くなっている。ぷしゅーとかいって壊れそうだ。

「まだ体調悪いならベンチで休むか？」

「いえ、そういう訳では無いの」

「ならどうしたんだよ？」

珍しくはつきりしない雪乃に少し驚いている。いつもならもつと可憐さがあって、少

し怖いぐらいなのに今はむしろ可愛らしい。

こんな生き物抱きしめたい。

「べ、弁当を作ってきたのよ…」

「え？」

「弁当を作ったの！だから食べてくれるかしら?!」

「そんな顔真つ赤にして目に涙貯めながら言うなよ！嬉しいからほんとに！」

2 回言ったのが相当恥ずかしかったのか半泣きになってしまった。

悪気は無いよ？たまに雪乃をいじめてみると少し面白いからやってみただけです…。本当です。

「…本当に？」

「ああ、早く食べようぜ 雪乃が作ってきてくれたって聞いたらもつとお腹減ってきたよ」

「うふふ、そう。ならそのベンチに座りましょ」

雪乃が弁当を作ってくれたのは非常に嬉しい。まず雪乃は料理がとんでもなく上手い。そこの料理人と引けをとらないレベルだ。だからめちやくちや下手くそで食べられない…みたいなのは無いので安心だ。

これが一番の要因だが、『彼女の手作り弁当』これを貰ってうれしくないはずがない。

俺は嬉しすぎて抱きついちゃうぐらいだ。今やると怒られそうなので辞めておくが……
とりあえず、俺はとても嬉しい。彼女に雪乃に弁当を作ってきてもらえてとても嬉しい。
い。

「どうぞ召し上がれ」

「…おぉー！」

何かもう凄すぎて無意識のうちに声を上げてしまった。男の子が好きそうな唐揚げやハンバーグ、綺麗な卵焼き、色とりどりの野菜…などなどバランスが考えられており、これだけでも一生懸命作ってくれたんだと伺える。早く食べようと箸をつかもうとするが1本しか無いことに気付く。

「あれ？箸って1本しかないのか？」

「え？本当に？私としてしまったことが忘れてしまったわ…」

口ではこんなことを言っているが絶対に嘘だ。何故なら、今雪乃の顔を見ると明らかにニヤニヤしている訳である。これは偶然ではなくわざと起こったことだと容易にうかがえる。

「なら俺は手でたべるか…」

「それは汚いのでやめなさい」

「なら食べるのやめろってか？こんな美味しそうなものを並べられて止めるのか？」

「そんなことは言っていないでしょう？はあ…」

「た、ため息つくなよ…俺が悪いみたいじゃねえーか」

これって俺が悪いの？

雪乃が2つ持ってきてきたらこんな事になってないから雪乃のせいじゃないの？怖いから口にしないけどね。

「こうすればいいでしょう…あーん」

雪乃は箸で卵焼きを掴み、俺の口元へと運ぼうとしている。まさかあれをやるのか…
「え？マジでいってんの？」

「早く…あーん」

「ああーもー！分かったよ…あーん…」

「…」

料理の感想が気になるのか俺を真剣な眼差しで見つめてくる。…正直、恥ずかしいのでやめてほしい。

「美味しい！」

「当たり前でしょう？私なのだから」

さつきまで心配そうな顔をしてたくせに、俺が美味いって言ったらドヤ顔しやがつて…可愛いすぎて困るぜ全く…

「雪乃は料理が上手だからな」

「え、ええそうよ ほらまだ沢山あるわよ」

「まだやるのかよ…あーん」

20分ぐらいすれば食べれる量だと思っていたが、あーんしていたせいで1時間ほどかかってしまった。俺がされる方だけではなくあーんする方も体験したが、やはり恥ずかしかった。これに耐えながら俺にしていたのはすごいと思う。：雪乃はすげえー。

弁当の感想だが、美味しい以外に言えなかった。卵焼きはダシがきいていたり、唐揚げには程よい塩味がしたり：俺が満足のいく食事になっていて嬉しかった。俺のために作ってくれたんだともっと嬉しくなった。

「食べ終わったことだし、次はどこに行きましようか？」

「次はお化け屋敷だ」

「わ、わかったわ…」

ジェットコースターの時みたいにはならないと思うが、雪乃の反応は楽しみだ。

「行きましよう」

「おう」

俺らはお化け屋敷に向けて歩き出した。歩いて数分の距離にある場所だったが手を繋ぎながら行った。

∴ 周りの視線はありえないほど痛かったが、俺はこの幸せを噛み締めていたかった。

12. 2人はデートする 後編

今はお化け屋敷の入場を待っているがかれこれ1時間程度待っている。まさかこんなに待つとは思っていなかった。俺1人だったら問題無いが、雪乃と一緒になので心配である。あいつは人ごみが苦手だからな。心配だ…

「人多いけど大丈夫か？雪乃って人ごみ苦手だろ？」

「ええ、ちよつと辛いわ。でも八幡が近くにいるから大丈夫」

「そ、そうか。なら良かった」

そんな良い笑顔を俺に向けてくれ。もつと惚れてしまう。

昔だったらこんな笑顔は見せてくれなかったと思う。基本笑顔を見せるようなやつではなかったし、見せても少し冷たい感じがした。今は全く違う。冷たくはなく暖かい。昔と同じように俺のことを罵倒してくる。昔はDSかと思っていたが、今は照れると俺のことを罵倒するので照れ隠しだとすぐに分かる。可愛いとこあるな雪乃も。

まあとにかく、雪乃は変わった。悪い方向ではなく、いい方向に変わったと思う。なるべくこのままでいてほしい。

「後10分ぐらいか…ちよつと長かったな」

「本当よ、八幡が行くつて言わなかったらこんな行列並ばないわ」

「悪かったよ。でも雪乃と行って見たかったんだから仕方ないだろ？他の奴と来てもつまらないし」

「そ、そうかしら…ならいいのだけど…」

照れてる照れてる。見ていてほっこりする。

雪乃をいじっていると、もう中に入れそうだ。少し俺も緊張してきた。

「行くぞ？」

「ええ…」

少し怖がっている表情をしている。ジェットコースター同様に苦手な気がするが、ここまで来たなら引き返せないで行くしかない。

「きやあー！」

「うおっ！」

二人揃って大声出してびっくりしてしまった。普通はここは彼氏が守らないといけないと思うけど少々無理がある。だって俺も怖いし。

ぺちよ。

「な、何か付いたわ！八幡取ってお願い！」

「付いてないって！多分怖らがせるための仕掛けだつて！」

「本当に?」

「ほんとほんと!」

雪乃は半泣きである。少しかわいそうになってきた。泣かれたら俺も申し訳ない気持ちになるので勇気を振り絞る事にした。

「…ほら」

「ぐすん…何よ?」

「手繋げば少しは安心するだろ?」

「言うのが遅いのよ…」

雪乃はいつもよりギュツと力を込めて握ってきた。俺と手を繋いだところで恐怖心が和らぐ訳では無いが。

「きやあー!」

「痛い痛い!強く握りすぎ!」

20分ほどかかってお化け屋敷を抜けることが出来た。

元から体力が無い雪乃が叫び声をあげながらお化け屋敷を20分も歩いていたので相当疲れているだろう。表情からしても疲れが目に見える。

「大丈夫か?」

「大丈夫じゃないわ…もう帰りたい」

「俺みたいに帰宅を進めるな…もう一つだけ行きたいところが…見せたいところがあるから」

「…?!」

この場所に、遊園地に連れてきたのは1つ目的があった。ジェットコースター乗らしたり、お化け屋敷入ったりと雪乃を脅かすというのも目的であったが、それよりも遥かに大切なものだ。

「……だよ」

「…観覧車?」

俺が連れてきたのは巷で有名な観覧車だった。これに夕方に乗ると永遠に一緒に居れるとかいう伝説?あるらしい。信じる訳では無いが、雪乃と一緒にいたいのでこの噂を利用することにした。しないよりした方がマシだろ?

「綺麗ね…見ていて心が落ち着くわ」

「俺もだよ。こういうのいいな…」

観覧車から見える景色は今日居た遊園地が一望出来るほど高い位置から見下ろせる。そしてなんといつても噂以上の夕日だ。雪乃と一緒にこれに本当に良かった。

「俺のお願い聞いてくれるか?」

「出来ることなら何でも構わないわ」

「ならキスしよう?」

「…許可を求めずに自然にやって欲しかったわ」

「いきなりやったら殴られそうだから」

「そんなことする訳ないでしょ?…」

目を閉じてキスを待つ姿勢になる。夕日の光に反射していつもより雪乃の事が綺麗に見える。

少しずう雪乃との距離を縮めてその距離が0になる。手を繋いだり、抱きしめたりはするがキスはあまりしない。俺達にとつたら簡単なことではないということだ。毎日するよりこうやって雰囲気を大事にする方が俺はいいと思う。

「…日頃からしてくれればいいのに」

前言撤回します。別れ際とかなら俺もしてもいいと思いますよ。てかしたいです。

「ああ、出来たらな」

「お願いするわ」

こんな可愛い彼女にお願いされたら断るわけにはいかない。…断りたい時にも言えないので困るが…

「なら帰るか」

「もう良い時間だし、帰りましょうか」

「妹が待つてるからな」

「…シスコン」

「うっせ」

高校時代に戻ったような感覚がある。昔こんな会話してた覚えがあるしな。

遊園地を出ようとした時に元奉仕部が揃ってしまった。まさかの出来事だった。

「…由比ヶ浜?」

「ヒツキー?それにゆきのんまで…」

「由比ヶ浜さん…」

「どうして2人が一緒に居るの?」

とてもまずい事になった。ここで由比ヶ浜に会ったら言い訳のしようがない。だが、ここで逃げるわけにもいかない。俺は珍しく男としてこの状況から正面から立ち向かう事にした。

13. 比企谷八幡は苦勞する

俺は逃げられない状況に直面している。本音ではこんな時に由比ヶ浜に会いたくなかったが、いつかこうなることは重々承知していた。解決すべき問題を後回しにした俺の落ち度に問題がある。

しかし、どうやって説明したらいいか分からない。昔のように自分を犠牲にするという方法もあるが、今は絶対にそんな事はしない。俺のせいで雪乃が傷つくのは嫌だからだ。自分と雪乃を傷付けず守る方法、今の俺には解決策はない。

「どうして一緒に居るの?」

俺はどうしたらいいか分からなかった。学生の頃から俺に好意を寄せていることは知っていたが、俺はそれをことごとく遮ってきた。ちゃんとした気持ちを聞かずに。それなのに俺は雪乃から告白された承し付き合っている。嘘についてもいいが、その場は解決してもこれからギスギスしっぱなしだろう。俺はそんなのはゴメンだ。一緒に大で楽しく過ごしたいと思っっているし、何より俺と雪乃の親友だ。バラバラになるのは望んじやない。

「俺と雪乃は付き合ってるんだ。まだ話してなかったか」

「えっ…」

途端に由比ヶ浜の顔が曇る。それもそのはずだ。いきなり会って理由を聞いてみれば付き合っているという事実を聞かせただけだ。相談もなくいきなり。俺が逆の立場だったら間違いなく怒る。

「本当よ。私と八幡は付き合っているの。私が卒業式の日に告白して返事をもらったの」

「そう、なんだ…」

無理に笑顔を作ろうとするがいつもみたいな元気の良さが欠片も感じられない。

「ヒッキー。１つだけ聞いていい？」

「なんだ？」

大きく深呼吸してから真面目な顔に切り替え俺の方へと向く。重要なことなんだろう。

「ゆきのんの前に…あたしが告白したらどうなってた？」

「…」

「お願い、答えて…?」

俺は答えた方がいいのだろうか。これを口にしてしまったら由比ヶ浜がもつと傷つく。だが、由比ヶ浜本人が望んでいることのなら伝えることにする。

「俺はお前に…由比ヶ浜に先に告白しても俺は返事をしなかったと思う。あの日、俺が雪乃から告白されなかったら自分から行くつもりだった。俺から気持ちを伝えるはずだった。だから俺は由比ヶ浜と付き合うことは無かったと思う…」

俺は雪乃と付き合ってからこいつが本物と認識することが出来た。本物と理解できてない時に、雪乃に告白される前だったら俺はわからない。でも今は俺が雪乃が好きだ。これからも変わらない。

「そつか…告白する前に振られてたのか…」

「そ、その…すまん」

「い、いいよ謝らなくても。あたしも薄々気づいてたから」

「初恋は叶わないってホントなのか。ぐすつ」

由比ヶ浜は耐えきれなくなつたのか泣き出してしまった。俺からは手を差しのべることが出来ない。できるとすれば雪乃だけだ。

「雪乃、あいつのそばにいてくれ」

「…わかったわ」

「俺は飲み物買ってるから少しの間頼んだぞ」

「はい」

俺は由比ヶ浜のことを雪乃に任した。振った相手に俺は何て声をかけたらいいか分

からない。ここは雪乃に任せる他に方法がないのだ。

とりあえず俺は自動販売機でお茶や水やら適当に帰りゆつくりと元いた場所に戻ろうとする。

「あ、ヒツキー……」

「大丈夫か？」

「うん。ゆきのんからヒツキーに対する素直な気持ちが伝わってきたからね。これなら負けても仕方ないよ」

「ゆ、由比ヶ浜さん！」

「いいじゃん。あたしには告白する勇氣もなかったのにゆきのんは必死に気持ち振り絞って気持ち伝えたんだからさ。ホントすごいよ。でもね私は負けないから。好きな人に彼女がいるからって譲ったりしないから……!」

「そう……。私だって八幡のこと愛してるから譲るつもりは無いわ!隣から離れたくないもの!」

本人の前で言うの辞めてもらっていいですかね?好きとか愛してるとか言われるのは嬉しいけど2人っきりの時に言っしてほしい。恥ずかしいから。

「勝負だねゆきのん!負けないから!」

「望むところよ!」

「もう遅いし帰るね！今度3人で遊ぼうね！」

「そうね。また一緒に遊ぼうかしら」

「おう」

「バイバイ！」

俺達に背を向けて帰って行った。背を向ける前の由比ヶ浜の顔は笑っていたが、目からは涙が流れていた。

14. 雪ノ下雪乃は決断する

——雪乃side

私は一人暮らしの家ではなく、実家に帰ってきている。理由は簡単だ。

八幡との交際及び、結婚を認めてもらうためだ。

今の八幡は大学生であるから結婚とかは考えていないと思う。でも私は八幡と結婚したい。あの人以外で私は心を許せる気がしないから。由比ヶ浜さんは別だけど……

家の前まで来たが、緊張して足が動かない。八幡に付いてきても良かつたが、それを見た親が（主に母が）怒ると思ったからだ。1度怒ると手がつけられなくなるので常に冷静を保ってもらわなければならない。だから今回は連れてきてない。おそらく話したら付いてきたが。

家の前で考えていても仕方が無いので意をけして入ることにした。

「ただいま」

「あらあら雪乃ちゃんじゃない。どうしたの？」

家に入ってから声をかけてくれたのは母ではなく姉さんだった。母よりまじだが姉さんも苦手だ。

「母に話があるの」

「ふーん。私は今から出かけてくるからまたねー♪」

「いつてらっしやい」

姉さんが家にいたら助けてくれたかもしれないが、居たらそれはそれで手を出してきそうなので外周してくれて少し安心した。

私はすぐに母の部屋へと向かった。ノックをしてから部屋に入る。

「失礼します」

「あら、いつ帰ってきたの？」

「先ほど帰宅しました」

母はまだ優しい。これからどうなるかは私には予想がつかない。すんなりと行かないことだけは明らかだ。

「何か用があったの？」

「はい。…話があります。」

緊張して上手く言えないが八幡との交際を親に認めてもらうためにも今言うしかない。

「言ってみなさい」

「私は高校の同級生で同じ部活だった、比企谷八幡さんと付き合っています」

「…やはりその話ですか」

母は感ずいていたようだった。

「何か知っているのですか？」

「比企谷八幡とはこの子の事でしょ？」

母はタブレットを取り出し写真を私に見してきた。写っていたのは私の彼氏の比企

谷八幡本人だった。

「はい。その人と結婚を前提にお付き合いさせてもらっています」

「それは本当なの？」

「はい。私から想いを伝えてお互いの了承の元付き合いを始めました」

「なぜあの子なの？」

「私のことを理解しており、私も彼のことを理解しているからです」

「一般家庭の子よね？ダメとわかっていて付き合ったの？」

この質問は予想通りだった。私は八幡と付き合い合えなければ全く知らない人とお見合いをして、雪ノ下家の発展のために利用されるだけだった。親がひいたレールを歩いて行くのはどうしても気に入らなかった、でも私には心から好きな人が出来た。その人とずっと一緒に居たい、平和な家庭を築きたい。本当に八幡の事が好きだった。初めて私は心の底から愛おしい人が出来た。一緒に居るためには母を納得させなければならな

い。ここで間違えたら全てダメになる…。

「私は雪ノ下家には全く興味がありません。だから一般家庭の子、上流階級の子…家柄のことは関係ないです。確かに八幡が一般家庭の子では無かった方が良かったかもしれない。でも私には関係ない。八幡自身が好きだから…。」

ありつたけの想いを母に伝えた。これではダメかもしれない、否定されるかもしれない。その時は縁を切るだけ。

「…そう。なら雪乃のことはその比企谷八幡さんに任せるわ。そんだけ雪乃が好きになつたんだもの。安心だわ」

「ありがとうございます！」

本当に嬉しかった。結婚を認めてもらったというより八幡が認められたような気がして嬉しかった。

「ただしひとつだけ条件があります」

やはりただで許可されるわけでは無かった。どんな難しい条件でも乗り越えたい。それだけクリアすれば一緒にいれるから。

「その子と一緒に幸せになりなさい」

「は、はい！」

母の出した条件は簡単であり一生かかる難しいものだった。私にとってはこれだけ

でいいなら簡単だ。私の想いをしっかりと伝えて八幡に尽くすだけだ。それを応えてくれればいいのだが……

それはまたのお楽しみにしよう。

15. 2人の想い 前半

八幡とのお付き合いが認められてそれを伝えるために私は八幡の家に向かっている。実家に帰っていたため会うのは久しぶりで少し緊張するが、八幡に会いたい気持ちが強いため非常に楽しみである。

八幡とのこれからの事を考えているとあつという間に家に着いた。八幡の家族には普通に家に入ってもいいというのが正式に家族になるまでは辞めようと思う。…恥ずかしいもの。

ドアを開くとそれを予期していたかのように小町さんが迎えてくれた。

「雪乃お姉ちゃん！ やつと来てくれた！」

「遅くなってごめんなさいね。実家でいろいろと話をしていたら遅くなってしまったわ…」

「ちゃんと来てくれたので良かったです。それでお兄ちゃんとの話は…」

「大丈夫よ。後でちゃんと2人に話すから」

「はい！」

小町さんには一応話をしていた。私の母は八幡との交際を否定すること、八幡と引き

離すために海外へ行くこと…。

母が認めてくれた今は関係ないことだ。

「ところで八幡は？」

「レポートが終わらなくて徹夜だったらしいです。さすがに辛そうだったので寝かせてます」

「起こしに行ってもいいかしら？」

「7時間ぐらい寝てるのでいいですよー」

「わかったわ」

小町さんに許可を得て八幡の部屋に入れることになった。初めてという訳では無いがやはり緊張してしまう。私の場合だと好きな人と一緒の空間にいただけで幸せな気持ちとドキドキする気持ちが溢れ出てくるので仕方ない。

とりあえず八幡を起こさないといけはいので意をけして入ることにした。

コンコンコン…

八幡は深い睡眠なのか返事が無い。普段なら許可が無いのに入ることはしないが八幡の部屋なので入ることにした。：私たちは恋人だから全く構わないわよね。

部屋に入ってみるとベットの上ですーという寝息が聞こえる。私が部屋に入ったことを気づかないなんて相当疲れているようだ。

八幡の寝顔を見れることは少ないので少しだけ拝む事にした。

——私が誰よりも好きな顔。目が腐っているとよく言われるが最近は澄んでいることが多い。このアホ毛も好きなものの1つだ。

八幡を見ていると心が満たされていく気分だ。彼が私の寝顔を見たらどんな反応をするだろうか？私と同じような気持ちになってくれるだろうか？今度狸寝入りをして試してみようかしら

なんて今後の予定を立てている間に八幡が寝返りをうち私の方へ顔が向いた。つい無意識で八幡のほっぺたを触った。

∴柔らかに気持ち良い。

なんでこんなに柔らかいのだろうか？私としたことが例えが見つかからない。男の子の肌ってこんなにも柔らかいものなのかしら？経験が無い私にはわからない。∴八幡以外の男性とはしたくない。

ずっと頬を突っついてしていると起きてしまうとしまったので次はキスをすることにしました。頬を突つつくよりは恥ずかしいが私が彼にしたいことなので思い切つてすることにしました。

まずは頬に、次はおデコに∴最後に唇にそつとキスをした。

私がキスをした瞬間に八幡が目を覚ました。

「…おはよ」

「お、おはよく八幡」

私のしたことがバレてしまったのだろうか？悪いことはしていないがそれでも恥ずかしい。

「どうしたんだ？」

「は、八幡が起きないから私が起こしに来たの」

「俺の家に来た理由を聞いたんだが…まあ後から聞くか」

「そうしてくれると嬉しいわ」

「顔とか洗って着替えるからリビングで待つてくれるか？」

「ええ」

「後、雪乃からのキス嬉しかったぞ」

「え、ええ。ならよかったわ／＼」

起きていたなんて知らなかった。でも八幡が喜んでくれて良かった。そしてもつと喜んでもらうために話をしよう…。

16. 2人の想い 後半

雪乃の前ではかっこつけていたが、凄く恥ずかしかった。

なにあの行動?!可愛すぎるよ?惚れちゃうよ?!惚れてるけど。

いや、本当にびっくりしたよ?起きようとしたら唇に柔らかいものが触れた気がしたからうつすら目を開いたら雪乃が居てすぐに何が起こったかは分かったけど…

焦ってて何が言いたいか分からなくなってきた。とりあえず一つ分かるのは嬉しかった。普段は雪乃からキスしてくれないが、こういう時はしてくれるのが分かった。

雪乃が来た理由は分からないが、とりあえず顔を洗って服を着替えて雪乃が待つているリビングへと向かう。

「あら、遅かったのね」

「お、おう」

「何かあったの?」

雪乃からキスされてめっちゃ喜んでたなんて絶対に言えない!死んでも言えない!

「そ、そうなの／＼」

「え?どうした雪乃?」

「何でもないわ／＼」

「そ、そうか」

もしかして声に出てましたかね？こんなの間こえてたら恥ずかしくて死にたくなり
ますよマジで。

「今日はどうしたんだ？」

「いろいろあつたけど今日は大事な話があつて来たの」

「大事な話とは？」

「私たちのことについてよ」

「俺達のこと？」

別れの話だろうか？本当だったら俺死んじやう。

…今の俺は雪乃に依存しているのかもしれない。だが、その依存は今はいいと思つて
いる。しかし、その相手がいなくなつたらどうなるだろうか？自分でもわからないが今
まで以上に目つきが悪くなり卑屈になり自分のことを過小評価するだろう。そしてそ
の評価がこれから変化することがない。高くなることも低くなることもない。これま
で以上に嫌なやつとなり生きていくのだ。

「そうよ。私たちが付き合っていることを親に話したわ」

「そうか…」

雪乃のその一言で全てがわかった。おそらく親に話したことにより俺と雪乃の交際
は否定されたのだ。おそらく雪乃は止めようとしただろう。しかし、雪ノ下家は母親が
強いと聞いてる。つまりはそういう事だろう。全て否定されたのだ。雪乃の母親に
よって。

「それで雪乃の親はなんて言ってたんだ？」

俺はわかりきっていることを雪乃に聞いた。帰ってくる答えは分かっているのに。

俺が質問した途端に柔らかい笑顔を浮かべた。最後だからだろうか？償いの気持ち
が込められているからなのだろうか？

「ふふっ。認められたのよ。私たちのお付き合いがね」

…?!

理解出来なかった。自分が予想していた答えとは360度違ったからだ。…360
度って1周回ってるから答えは変わってないよ。

1人でツツコミを入れつつ俺は冷静になろうとする。今雪乃はなんて言った？雷に
打たれたような衝撃に耐えつつもう一度聞く。

「な、なんて言ったんだ？」

「目だけはなく耳まで腐ってしまったのかしら？」

「う、うるせーよ」

「もう一度言うわよ？ 私たちのお付き合いが親に認められたのよ！」

み、認められた？ こんな平凡な人間とお付き合いが？ そんな簡単に認められるはずがない。

「しかし、1つ条件があるわ。」

やっぱりあった。おそらく無理に等しい条件なのだろう。総理大臣になれとか。いやそれは完璧に無理ですね。

「親から『一緒に幸せになりなさい』だそうよ」

「…ええ？」

「どうかしたの？」

「そ、そんな事言ったのか?!」

「ええ。私は貴方と違って耳が腐っていないから聞き間違えることは無いわよ？」

「ほっとけ」

ほんとのまさかだった。交際が認められることといい、条件といい簡単なものだ。いやある意味かなりの時間をかけてもこの条件は達成できるかは分からないが。

「私が話したかったことは以上よ」

「雪乃…」

「な、なにかしら？ そんな真面目な顔をして」

雪乃は俺達のこれからを今後を考えて行動してくれた。今度は俺が雪乃のために動かなければならない。

「今度はお前の家に挨拶に行くよ。そこで宣言するよ」

「何を？」

「それはそこで聞いてくれ」

「…どうせ教えてくれないから諦めるわ」

「ありがとう。本当に」

「これくらい構わないわ」

雪ノ下家に行って挨拶しよう。そして正式な許可を貰おう。結婚するための許可を。

17. 同棲

俺は今、引越すするためにダンボールに荷物を詰めている。理由は簡単だ。雪ノ下雪乃、つまり俺の彼女と一緒に暮らすためだ。…何か変な言い方して恥ずかしい。

「何でにやけてるのかしら？ 貴方の荷物なんだから貴方が準備しなさい」

今の声は雪乃だ。昔と比べると随分と柔らかくなった。けして部分的な事を言ってる訳では無い。柔らかいどころかこれから育つので張ってくるのではないか？ 今度確かめてみよう…

「何で注意したのに余計にニヤニヤするのかしら？ Mなの？ ドMなの？」

「これから同棲する事を考えてたら想像が止まらなくて…ま、まあとにかく幸せなんだよ」

「そ、そう。ならいいわ」

雪乃はストレートに気持ち伝えられると顔を赤くして俯いてしまう。今も照れているので俯いている。照れている時は決まってこの反応をしてくれるので分かりやすい。

「確かに私も幸せだけど準備が終わらないと一緒に生活も出来ないわ。早くしなさい」

「そうだな。折角雪乃の母親から許可をもらったのに勿体ないもんな」

「そう思うなら早くしなさい」

「へーい」

雪乃の母親に伝わっていることは知っていたがやはり挨拶に行くのは少し怖かった。目の前にすると雪乃と陽乃さんの母親とだけあって威圧感がとにかく凄かった。…もつと他に言い表したいがそれ以外に表現する言葉がなかった。

とりあえず俺は雪乃の母親に挨拶をして、結婚したいことを伝えると優しい表情になった。

「それは全然構いません。雪乃のことを大切にしてください。…それと同棲の事は頭にありませんか？」

否定されることは一切なく前向きな事しか言わなかった。最後以外は…

「ここまででしたのですから雪乃を傷つけたり、別れたりしたら許しませんよ？」

これを見てやはり雪乃はこの人の娘なんだと実感した。昔の雪乃のそっくりな目と雰囲気を感じさせるようなものがあつたが雪乃の方がまだ優しくかつた。あれは怖い…。雪乃と傷つけるつもりも、別れるつもりもないけど何かあつたらやばい。何がやばいつて俺の命がやばい。

とにかく雪乃の母親に正式に認められた俺達は雪乃と同棲する所になった。結婚し

てから慌てないように練習という意味で。

「ほらこっちは終わつたけど…貴方まだ終わつてないの？」

「あ、ああ。すまん」

「もう…早くしないと一緒に暮らせないじゃない…」

「デレた。めっちゃ可愛い。」

雪乃がたまにデレると本当に可愛いと思う。抱きしめたくなる。こんな所は他の人には見せたくないという気持ちも自然と湧いてくる。…俺の彼女は本当に可愛い。

「きゃ?!」

「わ、わるい」

「八幡つたら…」

抱きしめたくなるじゃなくて無意識で抱きしめていたようだ。仕方ないよね！こんなに可愛い彼女をほっとけるわけないよね！

「5分でもいいからこのままで…」

「5分だけよ…」

雪乃と抱き合ってるこの感じがなんとも心地よい。奉仕部の部室を思い出させるいい感じがする。そして雪乃に触れ合ってることにより安心するからだ。

「5分経つたわよ。早くどいてちょうだい？」

「あーはいはい。今どきます」

充分と雪乃と抱き合った俺は手際よくダンボールに必要なものを詰めていった。黙々と作業したら2時間近くかかっても片付いなかったのに30分程度であつという間に片付いてしまった。

「こんなに早く終わるなら最初から何故やらなかったの？」

「…わるい」

こうなつてしまつたら俺は何も言い返せないので素直に謝る。これは今までのぼっち経験から学んだことだ。

『厄介事にしたくなければ素直に謝るべし』

素晴らしい。この教訓があるからこそ俺は雪乃とは喧嘩はしない。しても一方的に言い負かされるだけなのだが…。

「悪いと思つてるなら早く荷物を運んで。今日から新しいマンションに住むつもりだから」

「分かったよ」

これ以上怒らせると今日のご飯が無くなつてしまうかもしれないので素直に従うことにする。

新しいマンションはそこまで遠いわけではなく駅から徒歩3〜4分の所にある2L

DKの二人暮らしでは少し広い家だ。俺からした広いが雪乃からしたら「こんな普通じゃない。むしろ少し狭いわ」なんて言っていた。金持ちの感性は俺らとはかけ離れているみたいだ。雪ノ下家の本家があんなにデカイので納得はできるが…。

あれこれ考えているうちに2人分の荷物を運び終えた。

改めて見るとこのマンションはとても広い。1人だったら寂しくなってしまうに実家に帰るレベルだ。

「お疲れ様。紅茶をいれるから座っておいて」

「おう。わざわざ悪いな」

このマンションは冷蔵庫、テレビなど生活に必要なものは元から揃っており、必要なものといえば自分の衣類と食材ぐらいのものだ。本当は何も無いらしいが雪乃の母親が気をきかせてくれたらしい。非常にめんどくさいことを先にやっておいてもらえたのでとてもありがたい。

「はい、どうぞ」

「サンキュー。…ふう、やっぱり雪乃のいれた紅茶は美味しいな。これからもいれてくれるか？」

「も、もちろんよ！八幡が望むならいつまでもいれてあげるわ！」

「そ、そんな気合い入れなくても」

「あ、え、…嬉しくて舞い上がってしまったわ…」

雪乃はストレートに気持ちを伝えた時に2つの反応の仕方がある。1つはさつきみ
たいな顔を赤くして俯く場合。もう一つは嬉しすぎてテンションが上がる場合だ。レ
ベル的にいえば今の方が雪乃にとったら嬉しいようだ。

「…もつと嬉しい気持ちにして？」

そう言つて雪乃は唇を少しだけ突き出している。おそらくキスをして欲しいのだろ
う。雪乃の要求に素直に応じることしよう。

「うふっ。ありがとう」

「(こちら)こそ」

このキスをきっかけに新しいマンションでの生活が始まったような気がした。

18. 日常

雪乃との同棲が始まってから早くも1週間が経った。最初はどのようなのか不安だったが雪乃と居れるのはやつぱり幸せだった。

1日中ずっとゴロゴロしたり、静かに読書したりと思う存分同棲の良さを体験した。その反面、少し嫌な体験?もした。どちらが先にお風呂に入るとか:あれ?一つしかない。それでも少しケンカっぽくなるのが少々あった。それを差し引いても充分幸せだった。

幸せ真つ只中だが大学は休みならない。雪乃と1日中一緒に居られないと身体が途端に重たくなるが大学の講義があるので行かなければならない。身体にだるさが残るが大学に行くことにしよう。

とりあえず着いたが講義は午後からなのでまだ時間に余裕がある。昼ごはん前に出てきて食べていないので学食に向かうことにした。

食券を選ぼうとしているが安いので350円。今財布の中は500円。残るのは150円。数学は苦手でも算数ぐらいは俺でもできる。そんなことは置いておいて、150円しか残らないということは500mlのジュースも買えないことになる。講義が

終わったあとにお腹が空くことも考えると今は我慢するのがいいかもしれない。いや、講義中にお腹がなつたらいくらぼつちの俺でも泣いてしまう自信がある。それだけはあつてはならない。

いろいろ考えているうちにかげられた。

「ヒツキー？」

このアホっぽい声は由比ヶ浜だな。ここは仕方ないが力を貸してもらおうしかない。ついでにいろいろと報告もしないとな…。

「おう。いきなりで悪いんだが財布忘れちまって飯が食えないんだよ。さすがに講義中になるとまずいから奢ってくれないか？」

「ええ〜？奢って欲しいの？」

何かうん。小悪魔ですかあなたは？

まるで今の顔は一色さんですよ？その小悪魔みたいな笑い方。

「ああ。後、由比ヶ浜には言いたいことがあつたからな」

「え、あ、うん」

急に俺が真面目な顔になったのがびっくりしたのか小悪魔の笑みは消え俺と同じように真面目な顔つきになっていた。

由比ヶ浜に奢って貰い、隅っこに座ることにした。あまり聞かれないことではないし

な…。

「ヒツキー？話って何？」

「おう。まあ単刀直入に言うぞ。俺と雪乃は結婚する事になった」

「そう、なんだ」

やはり由比ヶ浜はショックなのだろうか？高校の時から好意を抱いていたことはラノベの主人公みたいな鈍感さは持ち合わせていないので分かっていた。こんなこと伝えるのは残酷だっただろうか？由比ヶ浜には悪いと思っただけでもない。でも伝えないと何も始まらないのだ。俺の中の本物は1つは雪乃だ。でもそれだけではない。奉仕部という環境も本物の1つなのだ。俺はそれを出来れば壊したくはない。由比ヶ浜の決断によつては儂く消えてしまいかもしれないが俺は認めたくない。あの場所で3人で過ごした時間は一生忘れることの出来ない俺の本物なのだから。

「ああ。嘘じゃない」

「そっか…。嘘じゃないのか。…でもきっぱり諦められるかも」

「本当か？」

「うん。…でもヒツキーもゆきのんも友達でいてね？2人はあたしのかげがけのない友達だから」

「当たり前だ。雪乃ももちろん俺もずっとそのつもりだ」

「ありがとう…」

「おう」

由比ヶ浜と話していたら講義の時間の5分前となっていた。今から行かなければ間に合わない。すぐに移動することにした。

「もうすぐで講義の時間だ。もう行くな?」

「え、あ、うん。分かったよ」

「あ、あと昼飯ありがとな。また今度お返しするから」

「え? そんなのいいよ気にしなくて」

「まあ今度なにか奢るから。じゃまたな!」

「またね」

そう言つて俺は食堂を後にした。

移動する際に由比ヶ浜の方を見たがやはり暗くなっていた。それでも俺は由比ヶ浜を信じている。それを乗り越えて3人が笑いあつて集まれることを。

そして俺は急いで講義が行われる教室へと向かったが10分程度遅刻してしまったので結局サボつて雪乃が待つ家に帰ることにした。

19. 幸せ

今日はいつもとより身体が重い。そう感じるのも仕方が無い。何せ昨日は色々であったのだが。そんな辛い事を忘れさせるような天使の寝顔をしている少女が隣にいる。

付き合ってみて、同棲してみても分かったことなのだが雪乃は朝が弱い。雪乃の大学の友人、由比ヶ浜：もしかしたら陽乃さんも知らないことなのかもしれない。

「雪乃く起きろく」

「ん、ん」

か、可愛い！これは戸塚をも超越してしまっている…!!

1位 雪乃

2位 小町

3位 戸塚

俺の中の天使ランキングが覆してしまうほど可愛いのだ。小町を超えたという事はもう…言葉にできない。

雪乃の可愛さは今は置いておいて、時計を見ると9時を過ぎている。いくら大学が休みといはいえこんな時間まで寝てるのもどうかと思う。雪乃には悪いがここは起こす

「ことにしよう。」

「ほら起きろ。もう9時過ぎてるぞ」

「もう少しだけ…比企谷くん…」

雪乃が寝ぼけてると昔の呼び方に戻る時がある。寝ぼけてる時だけこの呼び方に戻る。なので高校時代に戻った感じがしてなんとも懐かしい。そして恥ずかしい。

「俺がご飯作ってくるから出来上がる前には起きてこいよ」

「うん…」

寝起きだけはいつもの雪乃じゃないみたいだ。昨日は大学の課題で遅かったからしかたないけどな。

いつもは雪乃が作ってくれるが今日は俺が作ることにしよう。

…ご飯はあるから味噌汁作って魚焼いて…今日は和食にしよう。あとは適当にサラダを作って…よし完成。

完成すると同時に雪乃が椅子へ座った。

「おはよう八幡」

「おはよう雪乃」

「今日は八幡が作ってくれたのね。ごめんなさいね」

「昨日遅かっただろ？たまには俺にもやらないとな」

「ありがとう。助かるわ」

「お、おう」

お礼を言われるだけでこんなにドキドキするのはどうかと思う。それにそんな微笑みを向けられたら誰だつてドキドキしてしまうと思う。この笑顔をずっと俺に向いてほしいと心の底から思う。

「じゃあ食べましょうか」

「おう」

「いただきます」

二人揃つていただきますと言つてから食べる。

これは同棲してからのルールだ。これを1回やらないことがあつたがその時は…誰もが想像できるだろう。とりあえず怖かつたと言つておこう。その出来事以降はちゃんと挨拶してから食べるようになりましたよ？そうしないと次が怖い…。

「美味しいわね」

「まあな。たまに料理してるからな」

「私には叶わないけどね」

「同棲してから本当に上手になつたと思うぞ。する前もだが、今の方が格段に美味しいと思う」

「あ、ありがとう。あ、貴方への愛情が前よりも大きくなっているのだから今の方が美味しいのは当たり前よ」

「そ、そうか」

「ええ」

そんな顔を真つ赤にしてデレないでほしいです。朝からデレのんになられるとこっちの身が持ちません。

面と向かつて愛情とかそんなことを言われると照れてしまう。俺からいう分にはあまり思わないのだが、雪乃から言われると思わず照れてしまう。雪乃の場合は言っても言われても顔を真つ赤にしている。それも見ていて可愛いから別に構わないのだが。

「ズ馳走様」

「おう。今日はどうする?」

昨日、予定を立てようと雪乃の部屋へと向かったのだがとても入れる雰囲気ではなかったので辞めておいたのだ。

ちなみに、雪乃と俺の部屋は1つずつある。滅多なことがない限りは一緒の部屋にいる。課題に追われていたりするときは自分の部屋にこもって集中することが多いのだ。

「疲れたから寝たいのだけど…」

「そうか。なら今日はゴロゴロしてるか」

「貴方はそれでいいの？」

目を潤ませて首を少しだけ傾けて上目遣いなんてされたら断れません。ましてや雪乃がこんなことやったら効果は抜群だ。

「全然いいぞ。むしろ俺はずっと家でゴロゴロしてたいまである」

「それは許さないわ」

「分かっていますよ……」

「なら早くベットに行きましょ」

少しやらしい言い方に聞こえるが別に深い意味は無い。

ベットと言っても俺らはまだ……この先はNGです。

寝室に来てすぐに雪乃がベットに潜り込む。相当眠いのかウトウトしている。

「はち、まん？頭撫でてもらってもいいかしら？」

「ああ」

雪乃の言うとおりに頭を撫でることにした。

雪乃の髪はサラサラで撫でていて俺も気持ちいいと感じるほどだ。それに撫でる度にいい匂いがして俺がどうにかなりそうだ。

「ありがとう」

「気持ちいいか？」

「ええ。凄く」

そう言つて雪乃は夢の中へと行つてしまった。

昔だったら何も思わなかつたが今は1人が少しだけ辛い。いくら隣にいと分かつていても話す訳では無いので寂しい。

「俺も寝るか」

俺はそう言つてすぐに眠りについた。

——どれぐらい経つただろうか？隣を見ると一緒に寝た雪乃がいない。探そうと思ひ身体を起こしてすぐに寢室の扉を開けた。キッチンの方からいい匂いがする。

「あら、起きたの？気持ちよさそうに寝ていたから起こさなかつたわ。ご飯が出来ただけど食べるかしら？」

「食べるよ」

いつの間にかぐっすりと眠っていたようで気づけば19時になっていた。俺も相当熟睡したようだ。

すぐに食卓に移動し、雪乃が作ってくれた料理を食べることにした。

「どう？美味しいかしら？」

「とても美味しいよ。やっぱり雪乃の方が料理は上手だな」

「経験が上だからかしら？」

「そうかもしれないな」

そういつて黙々と雪乃の料理を味わうことにする。いつかはこれぐらい上手になつて雪乃を驚かせてみたいものである。

「ご馳走様々。はあ美味かった」

「お風呂はどうする？」

「今日は先に入るわ」

「わかったわ」

いつもだったら雪乃が先に入つて俺があとに入るのだが今日は何となく先に入りたかつた。

15分程度でお風呂から上がった。喉が乾いたので冷蔵庫の牛乳をつごうとするとソファアで雪乃が寝ていることに気づいた。

「雪乃く？こんな所で寝ていると風邪引くぞ？」

「んー…」

一応返事はあるが起きる気は無さそうだ。仕方ないので俺は雪乃を抱っこして寝室へと運ぶことにした。

「よーしよーし」と

おっさんみたいな声を出してから雪乃を抱き抱える。いざ持つてみると本当に同じ食事をしているのかと疑問になるほど軽かった。

やっぱりスレンダーだなあー全てにおいて。：スレンダーだよ本当に。大事なことになるので2回言いました。

雪乃をベットに寝かせて布団をかけてやる。そしてお休みのキスを頬にする。すると嬉しいのか少しだけ笑ったような気がした。

「いつまでもこんな幸せが続いてほしいなあ…」

本当に心の底から思う。いつまでも雪乃と一緒に居て、結婚して子供ができたらもっと楽しくなると思う。

これからの想像が止まらないまま俺も雪乃の横に寄り添って寝ることにした。

20. 夢

俺は夢を見ている…と思う。正直、信じられない後景が目の前に広がっている。

長い黒髪の女性が子供を抱いてとても優しい笑顔で浮かべながらその子供を見つめている。俺が見るからにその女性は雪ノ下雪乃で間違い無いと思う。俺が彼女のことを間違えるわけないし、あんな綺麗な人は世界中探してもどこにもいない。

高校時代だったらあんな笑顔を感じることは出来ないが、俺と付き合うようになってからは多くはないが優しい笑顔を向けてくれるようになったと思う。

信じられないというのは別のことだ。

…何故子供抱いているんだ？

俺はその、…あいつとまだそんな関係には進展していないし、夢の中で他の男の子供とも思わいたくない。…いったい誰の子供なんだ？

色々と考えているうちに子供を抱いた雪乃が俺の方への近づいてきた。

「どうしたの？何かあった？」

「あ、いや…何にもないよ」

「うふふ。何でそんなしどろもどろなの？昔に戻ったみたいね」

今の会話で何となく察したが、おそらく俺との子供で間違いないようだ。…ほかのやつの子供じゃなくて良かった。夢の中でも受け入れられないことだつてあるからな。

「可愛いな」

「でしょ？名前は雪音にしようと思つてゐるの。どうかしら？」

これは凄いい夢だな。まさか出産直後とは。こんな夢を見ることもないので堪能しておこう。

「そうだな。俺としても「雪」つていう字は入れたかつたし、何より可愛いから満足だ」「本当？ならこの子は今日から雪音にしましょう！

ほーら雪音、ママとパパですよ？」

な、なんとあの雪乃さんがママつぽくなつてゐる。おそらく現実で子供ができたなら全く同じことになるのだろう。雪乃が雪音を可愛がり、それを俺が見ていて微笑ましく見守る。是非とも実現したい未来だ。

「まだ生まれたばかりだからわかんねーよ。とりあえず今は寝かしといてやれ」

「そうね。今すぐに写真撮つたり愛でたいところなのだけど仕方ないわね。私も流石に疲れているし」

「雪乃も体力無いのに無理して頑張つたんだから今は休め」

「今は八幡の言う通りにするわ。…キスしてくれるかしら？」

「い、今か？」

「え、ええ。雪音が生まれてきてくれたのは本当に嬉しい限りなのだけど…その…」
「どうした？」

「八幡が雪音にばかり愛情を注いでしまつて私のことは相手にしてくれないんじゃないかかって心配になつたの…」

夢の中でも雪乃は雪乃だつた。不安になれば愛情を欲しがる。ストレートに伝えることはなかなかないが、どこにいても変わらないのだ。

「そんなわけないだろ。俺の中で一番は雪乃ただ1人だよ」

自分の口にしてから初めて認識することができたかもしれない。子供が1人2人とできて俺の中での一番は雪乃なのだ。これは何があつても変わらないことだ。

「本当に？」

「俺は虚言は吐かない。誰かさんと一緒でな」

そう言つて優しく雪乃にキスをした。

「うふふ、ありがとう。昔は虚言しか吐いていなかったけれど」

「それは忘れてくれ」

「無理よ。…なら私は休むわ。おやすみなさい」

「分かつたよ。おやすみ」

俺も寝ようと思ひ、目を瞑るとすぐに意識が遠のいていった。

気づくとそこは…見慣れない天井…ではなく、雪乃の顔があった。

「うおっ?!」

「あら、おはよう」

「お、お、おはよう」

寝起きでびっくりしたせいでオットセイみたいになつてしまった。

「なぜそんなにびっくりしたのかしら?…もしかしていやらしい夢でも見ていたの?」

一見笑っているように見えるが目が笑っていない。嫉妬のせいなのかめちやくちや怖い。

「ちげえーよ。雪乃が子供生んだ時の夢を見ていたんだよ」

「え?」

「ホントだぞ? 赤ちゃんを抱いてた雪乃は凄く優しい顔をしてたぞ」

「そ、そう」

照れて顔を真っ赤にする雪乃は本当に可愛いと思います。

「今すぐには無理だけど子供が欲しいな」

「そ、そうね。大学卒業したら欲しいわね」

「そんなにはやいのか?!」

「ええ。本当は今すぐに欲しいのだけどさすがに大学生のうちにはたいへんだと思うから。あと…」

「あと？」

「貴方と2人だけの時間を楽しみたいの…」

ずるいです。その表情。

顔を真つ赤にしながら上目遣いをし、目をウルウルさせてこちらを見ている。

「そ、そうだな。とりあえず卒業までは2人で愛し合おうな」

「ええー！」

2人だけの時間が楽しみたい、か。

確かに子供ができてからは互いを愛する時間はどうしても減ってしまうと思う。でも、やはり雪乃を1番としてこれからのことを考えていきたい。

幸せな家庭が作れるように頑張ろう。

21. ちよつとしたすれ違い 前編

最近の俺は何かと忙しい。何故ならバイトをしているからだ。1〜2カ月前から始めたがこれがなかなか辛い。やめたい。専業主婦になり…なんてことを言っていると雪乃に怒られそうなのでやめておく。

だが、バイトよりも辛いことがある。それは…
雪乃とデートに行けないことだ！

平日はバイトを講義が終わってから目一杯入れており、出かける時間すらない。土日は朝からなので全くもって雪乃のために使う時間が出来ない。唯一、雪乃に触れられるのは朝のちよつとした時間だけだ。会話して、外出するまえにソフトなキスをするだけ。1日や2日程度だったら気にするほどではないが、1週間を超えると辛い。もうやめたくなる。だが、絶対にやめられないのだ。これは指輪を買うためであり、生活のためであり、将来のためであるから…。

「あら、もう起きたのね」

「ああ。おはよう」

「今日はどうするの?」

「今日も朝からバイトだ」

朝からバイト、といった瞬間に暗い顔をする。やはり、俺と同じように寂しいのではないだろうか。

「そう、なの。帰りは何時ぐらいかわかるかしら？」

「多分22時ぐらいだと思う」

「今日もいつもと変わらないのね…」

そんなに暗い顔をするのはやめてほしい。しかも泣きそうだし。俺だって雪乃と一緒にいたいのが、今休んでしまうと買えなくなってしまうのだ。目標まであと少しなのにやめるわけにはいかない。一応はサプライズのつもりなので伝える気もない。∴罪悪感のせいで言いそうにはなるが…

そろそろ家を出ないと間に合わないのでバイトの準備をして、玄関に向かう。

「もう行くの？」

「そろそろ行かないと間に合わないからな」

「…」

「どうした？」

いきなり俯いてしまい話さなくなってしまった。

「もう行くぞ？」

「…まっつて！」

「なんだ？」

「何でそんなにバイトを入れるの？」

雪乃からしたら単純の質問だった。でも今は答えられない。言ってしまったら無駄になっってしまうから。

「欲しいものがあるからな」

「それってなに？」

いつもの雪乃と違つて細かく聞いてくる。時間も無いので適当に濁すことにした。

「まあアレだよ。とりあえず時間が無いから行つてくるな」

「…いつてらっしやい」

今日は時間がなかったのでキスはしなかった。

それにしてもキツイ。雪乃のあの顔を見ていると話してしまいそうになる。でもそれだけはダメなんだ。本当にごめんな、雪乃。

何度も自分に言い聞かせながらバイトをしている喫茶店へ急いで向かった。

22. ちよつとしたすれ違い 後編

喫茶店に着いてからも雪乃の事が頭から離れなかった。雪乃のことを想ってやっていることが裏目に出ているんじゃないか？逆に捨てられてしまうのではないか？

そんなことを考えていると言葉に出来ないような不安が押し寄せてきた。

「比企谷くん？大丈夫かい？」

俺のことを気を使って声をかけてくれたのは店長だった。

「ええ。まあ」

「体調悪そうだね。今日はもうあがるかい？」

「すいません。今日はそうします」

「気にしなくていいからね。体調良くなったら連絡して」

「はい。ありがとうございます」

本当にこの店長は良い人だ。俺のことなんか気遣ってくれる。そんな良い人に迷惑はかけてられない。

今日、全て決めよう。

22時に帰ると伝えていたが、バイトを早くあがってしまったので俺は目的である指

輪を買いに来た。

「いらつしやいませ。どのような指輪をお求めですか？」

「え、えっと、雪が強調されている指輪はないですか？」

「それでしたらこれなんていかがでしょうか？」

店員が勧めてきた指輪を見た時に直感的にこれだと思った。どう表現していいかわからなかったがこれは雪乃に似合うということだけがわかった。

次に指輪を渡すための場所を考える。

スマホを使って探していると良い店を見つけた。景色も良く評判がいいのでその店に連絡をして予約をした。

ラストは雪乃への連絡だ。

あいつは勘がいいから気づかれないように慎重に…。

「もしもし？八幡？」

「ああ、そうだけど」

「もしかしてもう帰ってこれるの？」

俺が早く帰ってほしいのが電話越しでも伝わってくるぐらい声が弾んでいる。本当に寂し想いしてるんだ…。ほんとごめん。

「その前に久しぶりに外で食事をしないか？俺が予約してるところがあるんだ」

「本当?! ならすぐ行くわね! 場所はどこ?」

「それはLINEで伝えるよ。22時に来てくれ」

「わかったわ! また後でね!」

「おう」

雪乃との電話を終えると急に体の力が抜けたような感覚に陥る。

何故緊張しているのか? それは俺が今から俺の人生をかけるからだ。これで断られ
たら八幡もう無理。立ち直れない。

俺は伝えた時間30分前に着ていた。緊張のあまり手汗が止まらない。もうやばい。
本当にやばい。

「八幡?!」

声をした方に体を向けるとそこにはドレスを身を包んだ雪乃が立っていた。少しだけ首を傾げてるのが可愛い。

「あ、あ。」

「どうしたの?」

「な、何でもない。それにしても、その、綺麗だな。」

「あ、ありがと」

ただ服装を褒めているだけなのにいつまで経っても俺と雪乃は顔を赤らめて照れて

いる。変わらないな。

「さあ店にはいるうか」

「ええ、そうね」

俺は雪乃の手を優しく引いて、店の中へ入って行く。店の中は調べたとおり落ち着いた空間が広がっており、俺らにぴったりだった。

「どうして私をこんな時に呼んだのかしら？」

いきなり確信へと迫る質問ですね。さすが雪乃さん。

「そ、そうだな。雪乃に大事な話があつたんだ」

「な、なに？」

とても悲しそうな顔をしている。別れを告げられるとても思っているのだろうか。

…違う。これは俺のせいだ。俺がうじうじしているからいけなかつたんだ。覚悟を

決めろ。勇気を降り絞れ！

俺はさつき店で買った指輪を雪乃の前に差し出す。

「雪ノ下雪乃さん。僕と結婚してください」

珍しく嘸まずに言い終えると心臓の音が聞こえる。周りに聞こえるんじゃないかと思ふほどバクバクと音を立てている。

「…」

「ゆ、雪乃さん？」

「本当なの？そんなのいつ用意したの？」

「指輪はバイトで貯めたお金で買ったんだよ。後はこれからのためかな」

「これからって……」

「俺も早すぎるとは思ったよ。でもあつてそんなはないだろう？」

「そうだけど……あなたね……」

「バイトのせいで雪乃に寂しい想いをさせてたのはすまなかつた。どうしても内緒でやりたかつたんだ。このこと伝えたら雪乃は俺と一緒に働くとかいいそうだから」

「当たり前でしょう！ 私たちのこれからのためなんだから！」

俺は勘違いをしていたのかもしれない。2人の将来のためなんだからそれが当たり前か。

「そう、だな。すまない」

「わ、わかればいいの」

1つ心のモヤモヤが取れたところで1番重要なことを聞いてみる。

「そ、それで雪乃さん？」

「なにかしら？」

「へ、返事は？」

「そんなの…OKに決まってるでしょう!!」

そう言って抱きついてきた雪乃を抱きしめると心の底から暖かい気持ちでいっぱいになった。やっぱりこいつが、雪ノ下雪乃が好きなんだと感じた。

23. 2人の子供

「起きてください！パパ！」

人が気持ちよく寝てるのに何だよ…今日は休日なんだよ寝かせてくれよ。

「起きてください！朝ごはん出来てますよ！」

どうしても起きてほしいのか俺の上に乗っている娘は俺の体を優しく揺さぶる。

…この声は雪音だな。起きなければ。

「んー起きたぞー」

「遅いですよ！ママが怒ってます！」

この娘が言うママというのは紛れもなく俺の最愛の人雪ノ下雪乃だ。いや、今は比企谷雪乃か。

そして今俺の体の上に乗っている娘は最愛の人との間にできた娘。比企谷雪音（ひきがやゆきね）である。

本当に可愛い娘で、容姿は雪乃をそのまま縮小した感じだ。髪の毛も雪乃譲りだ。比企谷家の遺伝なのかアホ毛を受け継いでいる。嬉しいけど、俺の娘って感じがするけど…なくてもよかったかな？って思ってる。

雪乃が言うにはこれ以上怒ると雪乃に怒られるので急いで顔を洗って食卓につく。

「遅いよ！パパ！ママと私が頑張って作ったのに！」

「ごめんごめん」

「まあ許してあげます」

「お、おう。すまんな」

今俺に説教をしたのは長女の雪菜（ゆきな）だ。非常に雪乃に似ていて、雪音と雪菜を並べると双子に見えるほどだ。唯一違うところといえば、1番似てはいけな目だろうか？ 本当にもつたいない。まあ俺と違って腐っているわけではなく、鋭いのだ。本当に。誰かさんの昔を思い出させるほどに……。あれ？ なんか寒いな。夏なのに。

ちなみに、雪菜が長女で、雪音が次女だ。

「本当にあなたは遅いわね。しっかりして」

「休日だからいいだろ？ 久しぶりだし」

「仕方ないわね」

俺は今社畜として頑張っているのだ。昔は専業主夫が夢とか言っていたのに今は、雪乃、雪菜、雪音の笑顔が見ればいいと思っている。何十年もすれば人間は変わるものだな。

「さて今日はどうしましょうか？」

「家でゴロゴロする」

「そこは今も昔も変わらないのね……」

「当たり前だ。なるべく外には出たくない」

社畜としてからの休日は家にいる機会が多い。疲れを癒したいというのもあるし、家族全員でまったりするのも癒しの一つだ。

「パパ……？ 連れてつてくれないのですか？」

「どこか連れてつてよ！」

雪菜と雪音は頼みごと……それ以外の時も俺に対してボディタッチが多い。最初は嬉しいと思っていたが、最近はやさコンじゃないかと疑っている。嬉しいよ？ 嬉しいけどホントヤバイって。

「八幡？ なんでデレデレしているのかしら？ 実の娘に」

「い、いえ？ そんなことはありませんよ？ ほんとだよ？」

「なら何故そんなに慌てるのかしら……」

「娘にやきもち焼くなよ。一番はお前だけだ！」

「も、もう！ 八幡ったら……」

「「ずるい！ 私もそんな事言われたい！」」

「やっぱりファザコンだったか……」

「当たり前です！パパが一番大好きです！他の人なんてありえません」

「雪菜も！パパ以外なんてありえない！」

「あのなあー…まあいいや」

こんな事言ってくれるの本当に嬉しいことなのだ。2人がもつと幼かった時のことならな…。

残念ながら雪菜は中3、雪音は中1なのだ。初恋の相手ぐらい見つけてほしいと父親としては思っている。他の男と居ることを想像すると大変辛いのだが、2人が俺に対してボディタッチをすると雪乃の目が冷たくなるのだ。そのためという訳では無いが2人が信用できるような男性を連れてきてほしいなものだ。

…ナヨナヨしたやつは絶対に許さん！護れると判断できれば別だが…。

まあとにかく！雪菜と雪音は俺のことを卒業してほしい！

「それで、どこに行きたいんだ？」

「連れてつてくれるの？」

「可愛い娘のためだからな」

え？やっぱり娘に甘いつて？

仕方ないぞ。ミニ雪乃は可愛い。これ絶対。

「やったあ！」

「いえーいー！」

雪菜と雪音は嬉しさのあまり一緒にとびはねている。せつかくなんだから友達と遊びに行けばいいに…。

あいつらは俺と雪乃と違って友達入ると思うけどなあ。

「やっぱり2人には甘いよね」

「そ、そんなことないって！」

雪乃が拗ねているので慰めるために優しくキスをした。

「い、今の行動に免じて信じてあげましょう」

「ふっ、相変わらず可愛いな。ほんとそういう所好きだぞ」

「あうー／＼」

「羨ましい…」

「なにいつてんだ」

2人にチョップをして目を覚まさせてやった。変なこと言ってたからな。

「ならショッピングモールにでも行くか。この前行った時におそろいのマグカップ欲しいって言ってただろ？」

「ええ！行きましょう八幡」

「うん！早く行こうよ！」

「早く行きましょう！楽しみだねパパ！」

「そうだな！行くか！」

「うん！」

俺は雪乃と手を繋いで。雪菜は雪音と手を繋いで。

俺達家族は本当に幸せだ。これからもこの幸せが続くように俺も一生懸命頑張ろう。

心の中で決意をして俺達はショッピングモールに向かった。

24. 家族デート

俺たち家族四人揃ってショッピングモールに来ていた。まあみんな何処にいるかわかるよな？ わからないとかありえないよな？

千葉の常識は置いとくとして、休日のショッピングモールはやはり多い。休日に出かけるのは間違っている。

「パパー？ 行きますよ？」

「ほら行きますよ！」

「八幡？ 何をぼつーとしているの？ 早く行くわよ」

俺を呼んでるのは嫁の雪乃と娘の雪菜と雪音だった。

ああ。三人を見ると心が浄化される。可愛いなあ、綺麗だなあ。

「歩くの早すぎ。もう少しゆっくり出来ない？」

「無理です！ パパとのデートを楽しみにしていたのです！」

「そっこだよ！ 一秒たりとも無駄にできないよ！」

娘二人がただのお出かけなのにデートと言っているのはどうにかできないものか……。

「はいはい。分かりましたよ。特別に手でも繋いであげますよ」

「やった!」

娘のために手を繋ぐなんてやだ、俺優しい。こんな父親は探してもいないと思います。

娘と手を繋ぎ歩こうとしたところで怪物よりも強いんじゃないか、というぐらい袖を引つ張っている子がいた。……あ、雪乃だった。

「どうした? そんな暗い顔をして」

「……どうもしてないわよ」

はあ。虚言は吐かないとか何とか言ってたのに。

雪菜と雪音と手を繋いでいるので機嫌を損ねてしまったようだ。本当に世話のかかる嫁さんだぜ。俺のこと好きって言うのは見えていてわかるから俺としてもありがたいけどな。

雪乃に機嫌を直してもらうために耳元で囁くことにした。

「家に帰ったら……な?」

「好きなようにしていい?」

「おう。雪乃のしたいことをしよう」

「……うん」

うんって……可愛いなあ（二回目）

急に子供に戻るところもなかなかいいな。これだから雪乃は可愛いんだ。

昔からこうなんだよ。本当に雪乃は可愛いんだよ。こんな人と家族になれて嬉しいな……はっ!! デレてしまった。今のは無しにしよう。聞こえてないしな。

「パパ?! ママとコソコソ何をやってるの? 早くしてよ!」

「わ、わかったよ! 雪音! 痛いからやめてって!」

「私たちに付き合ってもらうんですからね?!」

「は、はい」

雪乃と遜色ない何かを感じてしまったので思わず敬語で返してしまった。……この辺は間違いなく雪乃の血を受け継いでるな。

だつて一瞬で空気が冷えた感覚に陥ったもん。こんな雰囲気は俺には出せないからな。間違いないな。

「なら行くか!」

「はい!」

「そうね」

家族四人で仲良く休日を過ごした。

家では雪乃と二人で……てへ。

番外編

比企谷八幡の日常

高校の頃は土曜日と日曜日とは休むためのものだど心底思っていたので外に出ることはほとんど無かった。ほかの人に連れ出されることは多々あったが。

それは今も変わらないのかもしれない。だが、もう一つの意味があると思う。俺は休日を返上し、バイトを入れている。今までの俺だったら絶対にありえない。

「お兄ちゃんがバイト?! 熱でもあるの? 安静にしてなきやだめだよ!」

小町がこんなことを言っていて全く信じてもらえなかった。信用させるのに1時間ぐらいかかってしまったが。最後まで信じきってなかったような気がするが…。

俺がバイトをするのは2つぐらい理由がある。

1つ目は雪乃へのプレゼントを自分が働いたお金で買うためだ。彼女のためにプレゼント買うからお金頂戴! って言えばいくら家の親でもくれる。でもそれでは意味が無い。俺が汗水垂らして稼いだお金を自分なりに悩んだプレゼントを渡した方が自分としてもいい気持ちになれる。プレゼントのセンスは追求しないでもいい。

2つ目は喫茶店で働くことによってコーヒーの入れ方を学ぶことだ。正直MAX

コーヒーでも俺は全く構わないが、俺にだつてたまには砂糖を入れずに飲みたい時だつてある。その時に飲むコーヒーが不味かったら嫌だから理由がある。

あともう一つあつたな。雪乃の喜ぶ、幸せそうな顔が見たいのだ。バイトをするという理由が全てここにつながる。奉仕部に行つたらあいつら必ず紅茶を入れてくれた。俺個人として周りに認識されているという想いがちゃんと伝わつてきて本当に嬉しかった。その恩返しをしたいと思つてるから喫茶店にバイトする事にしたと思う。

今から始めようかなと思つていることの最後にはいつも雪乃が一緒やつている想像が容易につく。それは恋人という関係を超えて、家族という概念で…。

高校の時は雪乃から告白されて返事をしたが、次は俺からしたい。上手く言葉が纏まらなくてもいい、カツコ悪くてもいい。でも、雪乃への想いをちゃんと本人に伝えたい。プロポーズをいつか自分でしたい。そのためには俺はもつと雪乃に見合う男にならなくてはならない。今では到底かなつていない。それは俺自身ちゃんと分かっている。だが、そのままでは意味が無い。おそらく大学在学中の婚約はないと思う。だから大学在学中は自分を高められるだけ高め、雪乃の事を今以上にたくさん知り、これからも雪ノ下雪乃のことを愛していきたい。ずっと隣にいたいと心の底から思う。

俺は雪乃のことを考えつつ、喫茶店で黙々とコーヒーを入れるのであつた。

Happy—Valentine

俺は今日という日は全く意味が無いと思っっている。バレンタインデーだから好きな子に渡そ、お世話になつてる子に渡そうなどなど：チヨコを渡せば感謝の気持ちも伝わると思っっている。それは全く間違つている。伝えたいなら直接本人に話せばいい。物を使おうとしている時点で間違つている。そして俺は感謝されることをしていない。それどころか友達が居ない。よつて、チヨコを貰える訳では無い。

「ヒッキー！」

どこからか誰かを呼ぶ声がある。俺でないことは分かつてるので無視しよう。

「何で無視するし?!」

俺では無いと確信していたらそれが間違いだった。由比ヶ浜が俺のことを呼んでいた。どうせろくな事ではないだろう。

「悪かった。で、どうした?」

「そ、その…」

理由はわからないが顔を赤くして俯いてしまった。何にも言つてないのにこんな状態になるとどうしたらいいか分からなくなる。

「ぶ、部室で話すね！ゆきのんと一緒に渡したいものがあるから！」

「あ、おい」

言いたいことだけ言って走り去ってしまった。渡したいもの？今日は俺の誕生日ではないし：チョコではないだろうし：。全くわからん。今は授業が終わって部活の時間なので特別棟にある奉仕部がある部室へ向う。

渡したいものがあるとと言われて少しだけ緊張している。ここで忘れてたーとか言つて帰つてもいいが、平塚先生が後で怖いので素直に部室に入ることにしよう。

「おす」

「こんにちは」

「やつはろー！」

俺が部室に入っただけでみんながちゃんと挨拶を返してくれる。他の人からみたら当たり前のことかもしれないが、俺にとってはありえない事なのだ。俺が挨拶をしても返してくれないどころか誰も聞いていない。それならまだいいが、話しているグループの中に参加しようとする移動して行つて俺は一人なる。これが今までの俺は当たり前だったのだ。だが、今は違う。挨拶したら返してくれる部員が居る。雪ノ下は友達になろと言つて断られてしまったが、俺は友達だと思つている。無論、由比ヶ浜もだ。あんなに俺に話しかけてくれる子が友達な訳がない。相手がどう思つてるかは別として

∴

「さつき言つてた渡すものつてなんだ？」

ずっと気になつていたので単刀直入に聞いてみた。けして気になつてたからつて空見てたとかないからね？本当だからね？

「えつとね、そのー…今日つて何の日か知つてる？」

「周りを見てれば分かるぞ。バレンタインデーだろ？」

「そうだよ。だからチョコを渡したいんだ」

不安になつてきた。初めて奉仕部に来た時のあの依頼のことを思い出してしまったからだ。由比ヶ浜の料理の腕は壊滅的だ。最終的には食えるものになつていたが決して上手ではない。まあ手作りという点では良いと思うが。

「ま、まじか？そ、その大丈夫か？」

「ん？もしかして疑つてる?!あの時とは違うんだからね?!」

「お、おおー信用出来ねえー」

「そんなことを言つてるとあげないよ？」

それは困る。不味くてもいいからチョコレートが欲しいのでここは大人しく引くことにした。

「すいませんでした。」

「今日はやけに素直だねえーほらあげる」

そう言つて渡されたのはピンク色の袋に入っているチョコだった。見た目はそこそこだが、中に何が入っているかは分からない。てか、信用出来ない。

「ありがとな」

「そ、その私も…」

今度は雪ノ下が恥ずかしそうにしている。まさかこ、こいつも俺にくれるの？俺喜んじやうよ？泣いちやうよ？

「由比ヶ浜さんに作つてあまつたらあげるわ感謝しなさい」

「それでも嬉しいよありがとな」

「え、ええ。本当に今日は素直ね。明日は槍でも降るのかしら？それとも雪かしら？」

「せっかく感謝してるんだからお前も素直に受け取っておけ」

「そうね」

ふふ、と笑つてからいつものように本を読み始めた。

まさかこの俺がチョコを2つも貰えるとは。しかも、そこら辺の女の子ではなく、学年1位とクラスカースト上位にいるやつからチョコが貰えるとは…。本当に泣きそうだ。由比ヶ浜の方はめちやくちや心配だが、雪ノ下の方はお店のと変わらないほど美味しいのだろう。昔、由比ヶ浜の依頼で形が揃つてなくて、手作り感がある方が嬉しいと

言ったが少し違う。女の子が作ってくれた物なら形が揃っていてもいなくても男は嬉しいのだ。俺ではなかったら惚れているだろう。だって雪ノ下と由比ヶ浜だからな。俺は惚れないけど。

何はともあれ本当に嬉しい。帰ってありがたく頂戴しよう。

家に帰った時に俺の異変に気づいたのか声をかけてきた。

「何でそんなにニヤニヤしてるの？キモイよ」

「妹にそんなこと言われるとお兄ちゃん泣いちゃうよ？」

小町に言われて気づいたが、俺は心底喜んでるようだった。この思い出を忘れないようにしよう。